WASON
HW
1106

Sept. 1898
no. 471

明治三十一年九月十日

女學雜誌

第四百七十一號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百七十一號目次

◎社說
親としての人、子としての人、神人相見相愛

◎隨感
祭禮の日に、良心のよそほひ、信談詩語のすゞ、ただ心に秘めて人を念ふ、賢婦の尻、下駄の齒、人一切の万物此親あり　手紙は倫理に非す

◎家庭
宜しく勵むべし　山　訓
男子訓　井　信　道　人
私生兒
教育死活の鍵

◎文藝
河東節花園曲（自題後風行歌）
歌七首　花園女史門下詠

◎史談
史論片々（二）　おうそむ
（仁德帝の讓位）世評　清津の都、消息と理想の治長、政教問題、大化の革新と宗教、信長、秀吉及本願寺と宗教、武田信玄、外交と國威）

◎雜錄
朝の雨　花　影　子
夜山此水　白　水　郎
（下總の野、刀根の下流、大吠岬頭、駿河灘頭、日名淵畔と信濃讚子、中國路の禿山、雲の峰）
秋に與ふるの書　瑞　溪　子
富士雜詠

◎時文
幕末小史（二卷）、江戶作者淨瑠璃集

◎片々◎時報

社告

一本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
一十日發行の分は稍や平易にして家事を専らにし、第一、家庭の勢伴改善に注むる事柄を主として、其他、文藝、史談、雜錄の部に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する者の卓見を論述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。
一但し十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して購讀せらるゝものあらば其の請めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	
壹冊定價	拾錢
半年分定價	壹圓
一年分定價	壹圓九拾錢
（内國無郵税）	
代金は總て前金にて御注文ありたし、全集引賣諸の諸君は前金切れ後其節限無之間は引續き發送するも可有之事	

廣告料	
一行（廿七字詰）一回	前金拾錢
同　三回以上	一割引
同　六回以上	二割引

送金	
送金は東京麴町郵便支局に宛て小爲替にせられたし　郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし	

明治三十一年九月九日印刷
明治三十一年九月十日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川靜山
東京府北豐島郡巢鴨村字巢鴨二百四十六
發行所　女學雜誌社
東京市麴町區下六番町六番地
發賣所　女學雜誌社支局
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

社告

櫻井成明君譯
腓立比物語
正價金二十八錢　郵税金六錢

橫山雅男君著
婚姻論
正價金十二錢　郵税金四錢

池袋清風著
淺瀨の波
第一篇二冊、正價二十八錢　第二篇同　郵税一篇各々六錢

◎前號第四百七十號（八月廿九日發行）要目
◎時勢說（一）社會の墮落を如何せん（高村）◎名士の子愚物ある原因（曲油）（一）女師の一理（めぐみ）◎全國現在各種女學校一覽◎學者政治◎教育警察の用（井華）◎教育の綫絲長訂（文田哲錢）の若子◎斷腸の記（そおうむ）◎作家及社會に勸告（銀月）

故若松賤子英文集
巖本嘉志子
正價金六十錢　郵税金六錢

巖本善治著
我黨の女子教育
正價金二十七錢　郵税金二錢

故鈴木弘恭君述
百人一首講義
正價金二十八錢　郵税金四錢

同
文法口授
正價金十二錢　郵税金二錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東京裁縫女學校長 渡邊辰五郎先生著

裁縫教授書

全部三冊 定價金一圓 郵税金八錢

渡邊先生の裁縫に於けるや技術に長じ、理論に精しく、殊に其教授法の巧妙なるに至りては、餘人の企て及ぶ能はざる處なり。此書は即ち其特長の教授法によりて、諸般の裁縫技術を親切叮嚀に説明せられたるものなれば主婦は素より女學生の裁縫を學ぶに當りて、必ず一本を座右に備ふるの要あるなり。

大取次 東京巣鴨村 庚申塚 女學雜誌社

◎切拔通信の要旨

●切拔通信なすべき種目は農工業商政治法律外交[illegible]宗教歴史[illegible]時事問題交通土木建築園藝山林美術技藝各人身上に關する事等凡て諸新聞雜誌に掲載の件は小事件に至るまで其委托に應じ各新聞[illegible]なく包みて[illegible]を要旨にして以て[illegible]讀者の便益を期す

東京市京橋區采女町廿一番地東京通信社內

新聞切拔通信部

◎切拔手數料大要

○一己身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とす○一事件又は一時物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで○一會社又は一團體は全般に通ずる通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで○前記の事項と雖も關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるべし○月數に拘らず件數にて委托せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵税を併せ金貳拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せず○本社切拔通信[illegible]御入用の方は[illegible]次第[illegible]呈すべし

布川靜淵 小此木信一郎 二氏合著

俳諧史傳

和製美本 紙數三百二十頁 中本全一冊

定價廿七錢 郵送 四錢宛 許郵券代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に空しからしむ、幸甚何ぞ及ばん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七言、尺幅の裡、無限の煙波渺々として際なし、俳諧は和歌に生まれ、連歌に興り、松永貞徳となりて譜體を[illegible]にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂洗練なる正風俳諧の面目を構成す。數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる觀念を蕩漾せしめ、幽妙なる詩天地に逍遙す。其源流に溯り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を詳にし、編輯一番、炳焉として斯文學を胸底に活現せしむるを期したるは、我が俳諧史傳なり。之を分てば、俳人個々の傳記となり、之を聯ぬれば、整々一卷の史稿となす。逸事あり、名句あり。一誦の下、恍々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如くならしむ。若し夫れ一篇軽々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易明暢、敘記精細剴切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可からず。

早稻田文學評に曰く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る闊大なる、叙事評論の其主題と相叶ふて優美、奇警、又閑雅、又遒勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの效あり。

出版發賣元 女學雜誌社

[illegible]日本銀行[illegible]人[illegible]

○田口卯吉著

國家計簿記法

全一冊 定價金弐拾銭 郵送料金四銭

[illegible]するは[illegible]すべきの要書なり

○日本銀行[illegible]人[illegible]

同例題

全一冊 定價金[illegible]拾銭 郵送料金六銭

[illegible]

○[illegible]

記

諸帳簿仕拂[illegible]

同金七銭 郵税金弐銭

同金七銭 郵税金弐銭

同[illegible] 郵税金四銭

[illegible]するの[illegible]なり

[illegible]

發行所

合名會社 經濟雜誌社

オルガン製造諸樂器修繕に應ず

[illegible]

[illegible]風琴製造處

女學雜誌

第四百七拾一號

明治三十一年九月十四日發兌

社説

親としての人、子としての人。神人相思相愛

古人の語に、鳩に三枝の禮あり、烏に反哺の孝ありと云ふヿがある。鳩は、禮義あつき鳥で、枝三段を隔てねば親と一木に留まらず、烏は孝心深くして、老たる親に哺を反へし、之を育くむと云ふ。鳥類すら尚は斯の如しとして、人に孝道禮節を教へたのである。

然るに、或る學者の言はるゝには、之は全く反對である。鳩は柔和の質ゆゑ、若し喧嘩でもするときは、ムシクシとして無言で長く怒つて居る。丁度、内氣の男が、ひちくどく腹を立てて居ると同じヿである。親子兄弟、もしくは夫婦の間ですら、互ひに腹を立て三枝を隔てて、ツンとして居るのが鳩の嫌な所だ。又、烏は横着極まる奴で、年を老つた親が折角、たべものを求つて嘴にくはへて居ると、無理に其の口の中へ己れの嘴を突込んで迄で之を奪つて仕舞ふ。其の突込んで奪ふ所を見て反哺などと云ふは馬鹿な話で、反哺どころに非ず、横奪するのであると言ふた。

此の二つの説の何れが是たるか非たるかは暫らく言はぬ。同一の事實を見て之に二樣の觀察のある事、而も全く反對したる表裏の解釋のあるヿが、之によつて分る。然し、其の二樣は何れも空論でない、互ひに事實を目擊して、明瞭に説を立たのである。斷じて根抵なき説ではない。然るに其の互ひに相ひ反するヿ、斯の如くである。

昔、柳下惠は飴を見て、老父に養ひにせんヿを思ひ、盜跖は之を見て、錠をねぢ切る時に用ゐんヿを思案したと云ふ。同一の品を見ても、人によつて其の考へ方が、斯の樣に反對するものゆゑ、他人から見て之を評する時は、尚更ら色々に見えるに相違ないヿである。一方で、人を見たらば泥棒と思へ

と云ふ。コチラでは、人には決して鬼は無いと云ふ。此の双方の断定は何れも誤まつては居らぬ。夫々の清過したる経験から言ひ立てたので、其の経験は決して誤では無い。

左れば、人間は、見様、見方で、如何やうにも解するとが出來る。只だ其の肉體から見れば、一個の動物である。猿猴と相異なるは毛三本の多少であるとも言ひ、否な、猿猴とは先祖を同うするのであるとも言へる。ナル程、其の骨格を見れば、昔は四足で歩るいて居つた痕跡がある。今こそ、毛は所々に少しづゝ殘つて居る丈けであるが、一度は禽獸と同樣、全體に毛があつて、追々、豚のやうに薄くなり、遂に抜けて仕舞つたらしい跡方もある。男にも乳房が大きく、女にも、髭があり、昔は一度、畜生同樣の交りを仕て居つたらしくもある。故に、今に至つても尚ほ其の遺傳を存し、全く其の余習を去つて仕舞ふと云ふとは出來ぬと言ふ說もある。決して誤謬では無い。

又、或る人の言ふに、人は本來、利己の性質に滿ちたものである。何如なるとも、己を利するど云ふ。我身勝手の所から割出したものである。忠孝節義なとと云ふ立派の道徳も、元は我が益を得ると云ふ所から由來したのであると云ふ說を立てる。さう言へば、ソウも言はれるのである。

之に反して、人の美なる所を見れば、又、樣々の美がある。赤穗四十七士の忠義を聞けば、百代の下、尚ほ人をして感奮興起せしめるとである。殊や、美人の熱腸、忠士忠僕の赤誠を思ふ時は、懦夫も起ち、匹婦も踴躍する。卑吝、陋劣の氣は脫然として抜けて仕舞ふ。

さて又、思慮深遠、見識卓越の人に接し、僅かに五尺の躰に附着する小さき頭脳の中から、白雲起り、黑雲捲き、青天も濁り知る可らざる如く、颶風の何處に吹くかを知らざる如く、揣摩忖度しがたきほどの深き思想に接する時は、我れ乍ら人間の不可思議なるに感じ、人の頭に大天地なるとを自負するに至るともある。

翻つて又、かの詩人歌人の述作を見れば、其の麗はしき情懐は、何處の靈府より發するかと疑はれる。泥より蓮を生じ、よどみより蛍を出すすら珍らしきに、此の汚れ多き人間の口の内から、如何なれば、清玉純金の名句が歌ひ出さるゝか。露に泣き、花に恨み、蝶に戀ひ、虫に喜ふ其の濃やかなる情

線は、誰の手のねじめなる乎、百性の躰は或ひは泥にも歸すべし、詩歌多恨の人の衣の裾は、追々、地より離れて、天にひるがへるかと思はれる。何たる美くしさぞと屢ば感涙にむせぶこともある。

扨て、斯樣に色々と、人の事を考へて見れば、又、色々に思はれる。夫々、一々、解釋があつて、其の解釋には一々事實と道理とがある。見樣によつて嫌にもあり、又、見樣を變へれば、實に感心である。

此處に至つて余は平生固く信ずる所の一つの説がある。即ち人は、之を親として見るにあらざれば、決して、其の最とも高貴なる所が見えねと云ふ事である。

凡そ、尤とも美なる繪畫は、母が子を抱くの姿であらうと思ふて居る。縷々として糸よりも細き其の氣息は、忽ち塞ぐとも出來る。脈々たる僅かの血の通ひも、直ちに止めることが出來る。其の尤とも可弱き生命を、一に母の保護に托し、豺狼來るも恐るゝことを知らず、毒蛇來るも逃げもすまじき、平和安息の無想無念にまどろみて、何か嬉しき夢を見つゝある幼兒の顏をながめ、母が涙をうかめて微笑しつゝある姿を想像して御覧なさい。天地間、かゝる麗しき繪が幾つありませうや。眞に、此處にこそ神居ますと題したき神々しき所である。

むかし、老親を棄てる習慣の土地で、息子が老母を脊負つて山深く登りゆいた。則はち、亦た之を棄てん爲めである。一歩登るほど、親を棄てる所に一歩近づくのである。一歩登り、一歩近づき、段々、山深く登つて來た。時に、老母は脊に負はれ乍ら、路傍の樹の枝を所々々折つてゆくから、息子はフト氣が着いた。母さん、何を爲さるのであり升かと聞たらば私は棄てられて死ぬる身だから構はぬが、お前が歸り道に迷つては成らぬから、枝を折つて置く。之を枝折にして歸り道に迷ふなと言ふた相である。

コレ實に親の心持を善く言ひ現はした一例である。親の心は如何にも斯である。我骨を刻り、肉を殺でも、我子の躰を立派にしたいと思ふのが、親の情である。斯く計り僞り多き世の中に、子を思ふのみは誠である。一點も雜り氣の無い赤誠である。此の親としての情からして人間を觀察せよ。親心を持つたる人間を觀察せよ。如何に立派、如何に純潔、如何に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

高貴である乎。此の一點から人間を見ざる以上は、人間の本色を窺ひ知ることが出來ぬ。

親としての人間に就いては、子としての人間ほど美くしいものはあるまい。子が親を念ふの情は逆も親が子に於けるの情には及ばぬとは云へ、孝心の現はれたる至情は如何にも立派なものである。親たるもの丶鏡によりて人間の美を見とめ、次に、子たるもの丶鏡によつて人間の美を考へれば、人間の尊貴靈妙なることを窺ふことが出來ぬ。

尤も、人は、子供の時に切に親を慕ひ、年とつて又切りに親を慕ふやうになるが、中ごろは、兎角、親の恩を忘れやすいものである。十二三才、少しく物の理屈を解する頃より、漸く々と生意氣になり、自分はひとりで天から降つてでも生れたやうに考へて、往々其の親を馬鹿にし、世間は、理屈と、我意と、我が腕力とで押し通せるもの丶やうに考へて、丸で親の恩を忘却することがある。然し、此の放蕩息子でも、年を取るごとに段々眞面目になり、眞面目になるほど、元に歸り、己れに、子と云ふものが出來る頃になると、甚だしく自分の親の事を思ひ出すやうになる。が、此時は既に晩く、大抵は既に其親に別れて居るのである。樹、靜かならんと欲すれば風休まず、子養はんと欲すれば、親在まさずと云ふの境界で、心に喜ぶ事のある毎に悲しくなる。アー、もしも我が親のましまさば、お喜こび下さるであらうにと思ふことが幾度もある。地位が上り、出世を爲し、少しは樂になり、善い普請でも出來たと云ふやうな時、もしも我親の居玉はゞ左こそお喜こび下さるであらうと思へば、すべて祝ひの時、欣喜の時ほど悲しくなるものである。斯様にして段々、年を取れば取るほど、いよ〳〵亡き親の事を思ひ出す、即ち、年老いて、子供に復り、丁度乳呑み兒が其母を慕ふと同じやうになつて來る。乃はち是れ、常德不離、復歸于嬰兒と云ふ所で、人間の第三の美術である。

扨て、以上に申し述べたる一段の說話を繰かへして、之を、天地と、人間との關係にしてあがへて見れば、神人相思ふの妙理が直ちに明白となるのである。此の天地は見様によつて如何とも見える。理窟から見れば理窟もあらう。器械的に見れば器械的の所もある。慘酷など云へば慘酷にもあらう。然し夫は人間を見るに色々の見様のあると同じことで、死してや

此の宏大なる天地を評するとであれば、千種万様の見方のあるは勿論の事である。然し乍ら、之を親として見とめ、之を親として慕ひ、遂に子となつたる人間の孝心を以て之に仕へるに至らざれば、天地の極美に接したとは言はれぬとである。古へより、聖賢は皆な此處に達して、天地に仕へられた。此の一事が殆んど聖賢に通じたる大孝心であつた。人は一時理屈張つて我意を通し、己れ一人で出來たものゝやうに思ふ生意氣時代もあるが、遂には皆な其の嬰兒に復歸して、天地の親を慕ふやうになる。此の大元に復歸せねば、ドウシテモ平和を得られぬやうになる。所々にうろつき巡り、躰にも心にも隨分放蕩をするとがあらうが、仕舞には其の本宅に歸つて來ねば、身の安んじ所がないやうになつて來る。天地と人間、即ち、神と人との間柄は、どうしても切るに切れぬもので、相思相愛の親子である。

彼の母親が其の娘の子の事を念ふや、髮の毛が伸びねば心配し、其色が悪るければ心配し、少し抜けれは心配する。即ち、髮の毛一本にも心配することであるが、天地の神が其の人間に於ける亦た斯の如し。聖經には髮毛一すぢだに尙ほ之を要ふとあるは、眞に親たる情の生粹を道破した所で、決して形容詞ではない。

古人の句に、「初雪やあれも人の子たるひろひ」とある。初雪の景色を巨燵にでもあたつて見て居る時、手足の指をかゝませ、寒氣にいぢけ乍ら、御用を聞いてありく子供を見れば、此の子供にも尙ほ親があるのだ親はさぞかし可愛いであらうと思ひやる。あれも亦た人の子であると考へて、親の愛情を推察し來れば、涙万斛に胸に溢れて來る。

敎育を爲ても左樣だ。英才を敎育するが樂しいなどとは未だ〱至らない話しだ、鈍才の子、白痴の兒を見るにつけ、此の兒の親はどれほど心配して居るであらう。片輪の子ほど可愛いものであるが、親は何んと思つて居るであらうと思ひ遣れば、敎育上の感念が忽まち變つて仕舞ふ。

宗敎の信仰が起つてから敎育の主義が一變したなどと、ヨク敎育歴史にも書いてあるが夫は、人間に其の天父あるとを知つて、天父の思召し、天父のお心の中を推察するに及んで、我ながら其の御慈愛に感泣する所から來るのである。

あゝ、アレにも親がある、親の情はドンナであらうと思へば、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

所云る「人の子たるひろひ」を云ふ至情にむつて來る。此の心が、人間物體の上に及ぶときが、人はすべて神の子なりと思つて尊敬する心が起るのである。

随感

○旅窓の朝顔

こゝろなしてふ花こそ今には人にも優りけれ、なさけなき世にあぢき無き世には、せめて花の有情なるをこそ好みさすべきにやあるらめ。朝疾く起き出でて旅のやどりの破れがきに匂ふ朝顔の花を観る、日々夜々切なき我がこゝろを慰めんものもなく、誰に果なき物思ひを寄せん便りもなきものを、爾、哀れと知りて、せめて苦るしき寐ざめの夢の名残りを消さんとはすらん、嗚呼、爾、薄くしてさめ易き衣を果敢なしともせず、露を生命に朝の大一と時を栄華と観じ、満衆の数を擴げて、妖艶の色を盛んにす、惜しげもなく其媚をしめして、我の如き不束ものに慰めを寄せんとする、爾こそ唯一つの有情者にてありけれ。許せかし、今ま全盛の御身をちぎりて、文に挿はさみ、長久に保存せん、又、御身の色を染めさせて、千万無量の文の面に血ぬらん。

○無心のよそほひ

又、ふとして承はるやうは英聖皇太后御遺愛の朝顔、今を盛りと無心に咲きそろひ、君なき大宮の玉のまがきに五色を献じ露の涙ハラ／＼として、朝な／＼出しを忍ぶ。花こそ物答への忠やかなるものなれ。今日となりて戀しも當年の奉公にかはらぬ誠、茲に窃かに其の姿を念じ、其の無心にして余念なき様を思ひ添へ、慟哭すること久し。

○情涙清思のすがた

戀み深きど、情け淡きと、何れか善かんめん。心を折り腸を断つ程度かを知らず、屡は痛哭して身を削り、夜々襟を沾はすは苦しきとにてあれど在りとて、人の情に感謝し、万物の有情によろこび、大抵、世の人の看過ぐして温かに感ずる事も無げなる事々の絶大に祝福を寄するを覚えては、誰か

多恨の人に煩へ多しとせんや。左るにても、淡懐平情の人、冷熱ともに感ぜず、憤るにもあらず、力むるにもあらず、無理に強ひてするにもあらず、純然に淡々として世を平かに暮しゆく爲躰を見れば、必らずしも其姿に化せんとを欲するにはあらずして而も其趣むきの羨ましき哉。但だ情熱絶頂に達し、炎火胸をもやし、冷やさんとして冷えず、忘れんとして忘れがたき苦悶痛絶の折柄こそ、嗚呼あゝ彼の淡き人の清けき愚さに化らんとの出來まじきかと、又もや思ひ切まることのあるものなり。之れ先づ多恨なればなるらん、之をしも思はじとするは最と難きもの也。

○心に秘めて人を念ふ

心に秘めて人を思ひつゝある人こそ奇しきものなれ。必らずや之を覺られじと自から制し乍ら、又幾分かは人に覺られたき氣色あり。半語、半默の間に、ほのめかして其の親しき友などに打語り、彌よ秘密の邊りに近づかんとすれば、忽まち緊縮して覆ひかくす。痴態あはれむべしと雖も、必竟、其の煩悶の堪へがたくして、少しなりとも、友の同情の得たければなり。友は必らずしも之を暴かんとせず、是非に其の全局を聞かんとせず、只だ知れる限りに於て、其の物思ひに同情を表すべし、これ限りなきの慈悲なり。屢ば斯の如く苦はしき人に出で合ひて其の衷心の遣る瀬なき所に泣く。人世、衝突多く、事物、故障なきは稀れなり。世に少なき赤誠を持ち乍ら、容易すく通ぜず、通じて結びがたく、結びて之を固めがたし。但だ只だ義に適せず、道に合はざる限り、人之を如何にせんや、一生を狂ひて了り、終身を物思ひに屈すとも、丈夫、佳人の本領を少介だに汚すなかれ、古道、顏色を照らし、白潔の光明遍ねく滿つ。強ひて其の分を守るの間にありて、唯一つの慰めは、友の同情たるなからんや。人の友たるもの、其の知り人に哀れの歎きあるを速に覺り、滿腔の情を與へて、其の言ひがたき悶えを慰むべし。斷じて之を痴なりとして笑ふとなかれ。人にありがちの常情を下げすむ人こそ寧ろ痴たるなき乎。われは其の情なき人に與みせず。

○舞姫の扇

放埓の人あり、某と云ふ。狹斜に豪遊して、黄白を塵芥の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

如くす。一朝、翻然として改め、曾て得たる纏妓の舞扇を出し、余に題せよと請ふ。表裏に、金泥銀泥を塗り、燦爛として美なり。余、題して云ふ、

漫雨一水、己本來清濁なし、悲歡離合、曾て煩惱を焔き、一顰一笑、人を悩殺せしむ。感謝せよ、汝が肝未だ破れざるに早く君子の手に拾はれ、忽ち清風を起す、須からく觀ずべし、噫、今に金銀の色を装ふとも、一片の紙、數骨を綴むに過ぎず、一度び皮破れ骨砕けては、忽ち棄てられん耳。遂に噫其骨髄を人間に寄せて、翁に清涼の氣を献げよと云ふ。

○下駄の齒入

二三錢の資本を餌し、筋骨と勉強とを賴みにして、下駄の齒入れ〳〵と叫びありくものにふと出で合ふ。夫より何度出で合ひて其のいつも〳〵商賣に骨を折る體裁を見る。之に因みて考ふるに、凡そ正直にして勤勉なる商人など更に屈服すべきものなし。時勢の善惡に關せず、政府の更迭に關せず、幸不幸、運不運に關せず、いつも有の儘に勉強して少しも氣をゆるむることなく、五年も、十年も、二十年も、三十年も、曾て怠たることなく而して、知らざる間に、追々、信用を増し、得意を廣げ、遂に一代の末に、中々の巨商となる。翻つて、彼のお士上りを見よ、時勢の如何、政府の如何、運不運の如何などに孤疑躊躇し、或る時は有頂天の氣に乘り、又或る時は奈落の下に氣を落す、其の常住不變の辛抱なきと、旨として、人世本來面白き變化とではなきとに氣の付かざるの致す所也。熱心は不可なるにあらねど、一圖にして續かざるは可らず、士の事を爲すや、大方は此の一圖の熱心によりて破れざるはなし。此の熱心の冷め易く續き難きの故なり。若し今の政士、もしくは教師、傳道者の儒にして、かの下駄の齒入の其の商賣に於けるが如き、平氣なる勤勉と、持續せる忍耐と、將たざるの辛抱とを存するあらば如今數は聞くが如き不平は出かるべきになどとぞ思ひける。

春の世とおもひすつれど猶に手な
おきてれし夜の心地こそすれ

蓮月

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○一切の万物其親あり

其の本を推考するときは、親なきものはあらず、學者之を元因によりての結果と云ふ。慈悲心の眼に映じては、單に之を元因と名づけて呼び去るに忍びず、惣じて之が胎養、乳育、保護を爲せし親らしきものゝなかる可らざるとを觀ずらし。古人歌ふて曰く、彼も人の子と、其意、之に親のあるとを念ずるの情なり。若し之に親あるとを感ずるを得ば、人の子を扱ふの慈悲油然として生ぜん。子の親を念ふは、親の子を念ふに及かざる遠し、人間、子を念ふの赤誠至愛に達して、稍や聖に近づくと云はん歟。左らば、親ごゝろの出るを以て人情の極致とす。親ごゝろをもて事業に臨み、又親ごゝろをもて万物に對す。一切の草木國土亦た之に親あるとを感得するに至りて、殆ど情の絶頂に達す。天地の觀識こゝに及びて、初めて至情あり、草露細草また無限の趣味あるを知る。人も一と度び此般の情操あるに至らば、安くんぞ怨言して、天道の是非を疑ふの悲哀あらんや。宇宙極めて情あり、白雲黑土亦た涙を含む。閑寂にわび、哀れに泣き、無漏流轉の世相にはかなむとも、其の厭惡絶望の域に落入るとなきは、事物に其の親あるとを覺れば也。

○至誠は倫理に非ず

至誠とは、純一無雜にして、間隙なく、理解なく、疑惑なきの生命を言ふ、道徳に合はんとし、公利民福に益せんとし、戒律慈愛に忠ならんとするなど、思慮工夫勉強するの境界にはあらず。もし何ほ此等の際を存するとあらば、未だ以て至誠無念の妙地に達せずと謂ふべし。今人、數は「國家の爲」と云ふ。既に國家の爲めにすとの自識を存せるあらば、其の赤誠の未だ達せざるを證す、必ずや其の居動自然ならず遂に無益の痕跡を殘し、因て以て他日の害を醸さんとを知る也。彼の教育に從事するもの、屢ば國家の爲と言ひ、傳道に從事するもの、亦た社會の爲と言ふなど、多くはともに究屈不自然の小義にあらざるはなし。何故に其誠積もり、情至り、氣發するの域に至らずして起つや。蓋し淺陋なる社會觀に動かされ、益もなき事業狂に迷へば也。之を詮ずるに其の病、學ばず修めざるより來る。人もし不學不修にして其の慈悲心

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を涵養するとなかつせば、何をもて黙然没我の消息に入らんや。井に落るものを見て無念に走り救ふ、これ至誠なり。人事を見て、無想に走り救ふに至らんは、只だ其の學修の積りて、慈悲心の熱すれば也、故に、修めざれば誠至らず、誠至らざれば真誠の事業あるとなし。古人切りに之を訓しく、今人の常に覺りがたきは何の故ぞ。

女學

官邸を廢すべし

曲浦

今の新大臣中には、その未だ、殿上に札をかけられで、借屋住居の詫しき昔にてましませし折には、いかめしき官邸の結構を睨んで、これは是非とも廢さねばならぬとの議論を立てられた方もあつたが、さて風雲際會とは奇しきものかな。この詫住居の君達、一躍して、官邸の先々の主人を追ひ出してさきには、無くもがなと思ひ玉ひし玉敷の臺には、今はかへつて、悠々然と住ひ玉ふこととなり、ある大臣の如く、さても官邸とは住み心地よきものかなと申したまひしはあれど、我が世にこそ、この無用の費えたるものを削るべしとは云い出でられず、冗費の廢止、行政の改革は断々乎として遂げ玉はんの勇氣はあれども、我住家なる官邸廢止の事は、オクビにも出さざるなり。

されど國家經濟よりの點のみならば、官邸なるものは、其儘に差置きても宜しかるべく、近々これから人才登用で、昨の一書生、今の大臣となることもあるべければ、さする場合には、大臣の借家住居も異なものなり。それにこれまでの諸元老で見ると、自邸の堂々たるものを有したまふなれば、其上に官邸などの用あるべき筈もないが、これからの新任大臣には、多年逆境に奔命した結果、大方は自邸を所有するものもなかるべければ、官邸なりと構へて住はさなければ、外聞が悪い、これは人民の方から見て、此位にはあへなければならんのだが、扨て大臣自身の為、其家族の為めなど思へば、進んで官邸入を辭退すべき筈なり。これまでは随分逆境に苦吟し玉ふて、間に合ひ普請の借家

に膝を容れたまひ、大家からは度々家賃の催促を受け、また時としては、執達吏の闖入を防ぐべき城壁もなき有様なりしが、一朝地位を變へては、官邸住居の身となり、入るには高門あり、かつては我を蔑如にせし巡査等、傍に佇立して、警衛を主どり、巍然たる高樓、其堂々たる玄關を昇れば、美々しき客間あり、この客間たるや、曩に未だ志を得ざりし日には、舊主人を訪問して、三顧四顧の後に、やつと通された塲處なるに、此處にて今は、主となりて、大風に來客を延きそれのみか、以前には、のぞいて見ることも出來なかつた、書齋、寢室、遊戯室、食堂、いづれも皆、濶歩横行を擅にする處となり、また庭園の風光、みな己が有となつては、住心地よしと申さるゝも無理ならぬことなるが、さて人心は慣し易きもの、この廣々とした大厦に三日でも住まうものならば、官邸の味ひ遂に忘れ難く、久しく之に住居する積にてもいつまた元の借屋住居に歸らねばならぬかも知れぬに、其時となつては、數十年の暮し向きの程度を、忽ち忘れて、まさか九尺二間でもないに、鼻が急につかへ出し、寢心地悪しく食甘からざるの嘆を發し玉ふべし。それにまた御主人のみならず、奥様まで、官邸住居となつてから、急に下女下男の數を增加し、かつ是迄の遣繰算段の家計と異なりて、莫大の收入あるとゝなつて、俄に自然の情として、金つかひ荒くなり食前、美味の數を增し玉ふあれば、大臣夫人に似合はしきやうと、衣類もこれまでになき價を以て新調するやうになる。要するに糟糠の妻としてのたすきがけの味をば忘れ、下女下男にあがめられ玉ふて、奥様たるの體面をいよ〳〵上げたまふ。然るに一度び御主人辭職となりたる後には、一旦增長した心はなか〳〵に取かへしがつかず、この奥様の家政は大分六ケ敷なるは當然なり。

そのうへに令息令孃達も亦、これまでと打つて變つた暮向に入つては、多くの出入の者、召使に持囃されて、エライものになつて、たとひ短日月の間であつても、隨分と悪い癖がついて仕舞ひ、それに親達は、子の可愛さに、金が自由となつた今では、子女の出入にも、車に乗らせ、令息には馬を買ひ與へられるやうになる。新大臣の家庭は、かくの如くにして俄かに膨脹して、一旦膨脹したるものは到底また元の通りに收縮し難し、それが收縮せいで濟むなれば結構なれども、榮

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

榮華の夢は極めて醒め易きものにて、其時には、殘るものは、たゞ正三位の肩書のみにて、自ら正三位樣の借屋住居は不體裁に感じ、妻子もまた、假の容貌をかこたん。一家みな、官邸の榮華を追懷して、野に住りて觀命するの苦を歎じ、不平失望一方ならざるべし。

されば、今の新大臣辭任後の家庭は、失禮ながら推察せられて氣の毒に思ふなり。もとより當今の名士には、多くは家庭の事などは、どうでもよいとしまたふ一般の風なれども、なほ假に立身し玉ひし方々の家庭の先々の事の思ひやらるゝなりされば、位は如何に高く上り玉ふとも、これ大命の然し、人道の和する處なるべければ、官數けれども、さて、一家これが爲に、富貴榮華を取るべしとは、天も地も共に許めぬ事なり、官邸の住居は、實に新大臣が將來永遠の得策に非ず、否寧ろ爲に宜しからず、子孫の爲に不利なり、されば官職には上りたまふとも、官邸の結構過ぎたるは之を遠ざけ、門前とは、あまりかけ隔のなき位の住家を求め、出入、召使のあまり多からぬ計をなしたまふべし。而して貴賓に接し、また公務を經し給ふ時丈けは、今の如く官邸を用ゐたまふも可なり、たゞ〳〵家族住居の爲に官邸を用ふるは不可なり。これは今また後に、盛に志を得て高位高官を極むる人材の、其家庭の和平安穩の爲にいふ。當に大臣のみならず、假に次官となり、局長となり、知事となりし方々の爲にも、同樣の勸告をなすものあり。

而も明らさまにいへば、官邸に住むといふは、恰も明家の留守番に來たやうなものにて、何時、立退きを云ひ付けらるるやも知れぬ、心細き住家なり。それよりは、むしろ小さき借家なりとも、當方から出るまでは、誰も立退きを命ずるものなき、安心なる住家あらん方、遙によろしからずや。

男子訓

井林道人

子弟訓は久しく人之を敎ふれども、父兄訓は、林子平よりぞはじまりける。また女訓といふには、數々多く、新撰女大學さへ出づる世なれども。女に對して男の戒と

すべき訓言は無し。男に對する、女の務をのみ、いと嚴に規戒して、女に對する男の務あることをいはぬは、依怙の沙汰とやいふべき。さればおのれおこの業ながら、日頃思ふふし〴〵を書いつらねて、この男子訓とはいふなり。

◎男子の父母に離れて、一身を立て、世を過すに當りて、一人の妻あるは、人間自然の情合に有之候、されど志も未だ定まらぬに、妻を求むるは、愚なり、早過ぎるとはあり、晩過ぎたるは無之候。

◎妻を求むる心になりて、女子の中を詮義する時には、既に虚心平氣ならねば、鑑定の狂ふこと多く候。若き男の、ほのかに見て、これはと思ふ女には、却て面白からぬもの多し。年頃の女は、愛嬌を振り蒔き、交際上手に、話面白くして、自らを飾るものなれば、無經驗なる男子は、その外面のゆかしく、いかにも學識才能のありさうに見ゆるに心惹かれ申候また姿かたちの美しきに迷ひ申候。而して隱れたる處にゆかしきふしあり、心の美なる點は、中々に認められぬものに候。若き男の、これは人物よ、學者よと尊敬する女は、年老いたる人には、身につくやうに思はれるものにて候。女の人物なり、學者と見ゆるものは、多くは、針持つすべは拙に、朝寢をなし、小理屈を吐き、而して實際は、家を理むるとは拙に、舅姑につかへ子弟を導き、下女下男を使ひ、また人に應對することの出來ぬものにて候。此等は遠くからの打見には愛嬌にもなりぬべし、妻とし擇ぶには、ゆめ〳〵避くべきことに候。

◎いかにも賢女らしく見ゆるものに、兎角不貞なるものありといふとにて候。またあまりに容色を整ふるに心を勞するものは、割合に、心美しからず、また家内に一人居の時などには、大方不作法なるものに候。これや芥を包むに、錦を加ふとや申すべく候。また年のあまりに若きを求むべからず、これにては舅姑の事ふるとも不心得にて、家が齊ひがたく候。年取ればよくなるとは申すものゝ、妻は、家に入る始めが大切に有之候。

◎されば外形にのみよらず、要するに實着なる女を求むべく候。殊に娘を見立つるには、其母の人となりを知るべく候。家を理むるとの上手なる母に、不しだらなる娘は稀に候。父

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

母が、あまりの愛に溺れて、多少の苦労をせさせてなき娘はよろしからず候。母が、舅姑に、また小舅小姑に事へて、随分と苦労したるを見習ひたる娘は、自然と心掛のまされる節あるものに候。学問と藝との有無は見立つべく候へ共、それのみにて、一生の類らひをなすに、宜しきものにては無之候。女学生ならば教場のみにて人物は分らぬものに候。寄宿舎にありては、朋輩また召使に対する挙動を察し、家にありては父母兄弟に事ふる所作を見るべく候。

◎事業を助け度き故など申す人は殊もしからず候。人を愛するものにて有度く候。諺に妻は下より貰へと申すことの候。これは下目なる家より娶れといふ詞の意味にてはなく、苦労したるものを貰へとの事に候。さりながら、不自由に暮して、精神の鍛錬の足らぬやうな女は、心のさもしきものにて、夫の家が、少しにても金まはりの宜しき時に、俄に驕りに昂ずるものに候。他人の世話になりて勉強したる女学生等が、一旦、多少の資産ある家に嫁へらるゝときには、忽ち氣取りて衣服などを着飾りて、折りかに、また以前の身分を知られてあるが、否さに、恩義ある家にも立ち寄らぬやうの不義理を致すこと多く候。さりとて又た持参金や、親の地位を當にて、妻を娶るは、男子としては恥づべきことに有之候。これはこの頃の流行に候。駙馬となりて、己にとくをつけ、而して妻の為に眉を低くやうなることは嗤ふべきことにて候。

◎若き男子が理想の婦人は、これ〳〵の條件を具へたるものなど、理屈は申しても、いざとならば、其理想は外れ勝に候。これは経験の眼がなき故に有之候。されば、妻を求むることは、先ず、父母または、経験ある男女の推擧を待つべきを當然と致し候

◎夫は頼り信むべきものにて候。妻は夫の為に身も心を捧げて、為よかれしとのみ思ふものなるを、甘美しき心根を受けきりにして、之に對する夫の酬をせぬは夫の道にては無之、しかも、男らしき處置にては無之候。一家和樂の責任は、妻よりも夫に重きものと常々考ふべく候

◎妻の嫉妬を戒むるは、古へより女訓の口喧しく説く處なれども、抑も妻をして嫉妬を起さすは、夫の不器量ゆゑにて候。夫が、自分の慾の為に、内妾外妾を蓄へて、而して妻たるも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のは、これを見て嫉妬すべからずなど、說くは、男の得手勝手と申すものにて、面目次第もなき事に候。男が手前理屈の女訓などは、三文の價値もなきものにて候。世の中には、また妻が嫉妬するより、いよ／＼當てつけに、妾など蓄ふるは男たるもの丶幅にはならず候。賤しむべき事に候。

◎妻は、夫を一生の、たゞ一つの寄邊となせるものにて候へば、夫の仕向け一つにても、如何やうにもなるものに候。妻のよろしからざるは、多くは、夫のよろしからざるが故にて候。貞女は、夫の作る處にて候。然るに夫自らを責めずして、妻のみせむるは、不道理千万にて候。緣といふ、不思議の結びあればこそ、これまで見ず知らずの男を、我夫とあがめ、衣食の事の煩はしきをも世話し呉るゝは、難有き事と思ひて謝すべき事にて候。我が腕にて養ふもの故、それ位の事は當然なり、男の器量一つ、何をなさうが、妻の小言をいふべき筋にてはなしなどいふは、哂ふべき空威張に候。

◎妻を愛し過ぐるといふことはなきものにて候。妻の夫を愛することは、夫の愛の增すに從つて、いよ／＼加はり、其愛の量は、夫の到底及ぶ處にては無く候。牝鶏の晨するといふは、夫の不甲斐性なるゆゑにて候。柔弱なる夫に從へば、妻は剛氣なるものとなり申候。女は愛の絆に縛ばられさへすれば如何にも、柔和貞淑となり、良妻となり申候。

◎外に出て、他人より頭を押へられる夫は、家に在りては、無暗と威張り散すものにて候。江戸の敵を、長崎にて打つやうな事を致すものにて候。男らしくもなき事にて候。外に在りては剛、內に在りては柔、これが、眞に男らしきといふものに候。

◎一家和樂の基は、夫婦相和するとに有之候、即ち相愛することにて候。妻にのみ求むる處多くして、自ら與へざるは、夫の夫たる道にては無之候。良き妻は、我身に代へて、夫を愛するものなるが如くに、良き夫は、妻をば、我身の半として、愛するものに候。誰しも我身の愛すべきは知り申候。妻は我身の半と思ひ、其心根の愛すべきを忘れず、之を勦り慰むべく候。一家は夫のみにて立たず、妻のみにて成らず、夫婦の愛にて全くなり申候。

◎されど、勦るといひても、橫道にそれ申しては、よろしからず候。やれ年が寄るはの、世帶じみるからのと申して、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なすべき仕事もさせず、雛様のやうに置物同様にするは、まことの愛といふものにて無之候。かやうにされる妻は、買ふてゝもすべき苦労はせず、心の鍛錬が出来ず、智慧が増さず、丸きり働なき女に了り申候。これは、愛するといふものにてはなく、戕ふといふものにて候。

○夫は父母と妻との間に立ちて、調和者となるべく候。妻と舅姑との中のわろきは、双方の不心得にて候。その不心得を正すは、夫の外に無之候。舅姑に事へ、下女下男を使ひ、出入の者を調するとの苦労は、妻に充分致させて、而して夫は之を助くべく候。この苦労は慈悲にて候。獨り妻の身に益あるのみならず、子孫の為に利する處尠からず候。妻は夫の内助者にて候如く、夫はまた妻の内助者にて候。夫をして内助の要なからしむるは、妻の理想にて候へ共、また夫は妻がこれが為に盡くす苦心を察むる務あるものにて候。この務めを怠りては、妻の理想は遂げ申さず候。

以上述べたる處、未だ盡さず候へ共、男子訓の一端として見らるべく候。なほ落ちたるは、おひ／＼補ひて申すべく

私生児

新に制定せられたる民法にては、妾の存在を認めずと雖も、なほ、私生児、庶子といふ名目はあり。それ世にも憐むべき、不幸の児は、かの私生児ならずや。彼等は父母の罪によりて生れたるものなりと雖も、其子果して何の罪かある、何の足らざる處かある。母の胎に宿ると十ヶ月、正當の順序を經て、天の如くに生れ出でたるものを、憐むべし、父母が道ならぬ行ひの因果、罪なき其子に報いて、彼等は私生児と呼ばれ、庶子と稱せられ、人の輕んずる處となり、兄弟の賤しむ處となり、而も産を繼ぐこと能はず。また彼等の中には、親ありと雖も、養ひを受くること能はざるものあり、其中よりして、多くの邪悪不逞の徒を出す。近日の談に、某の大臣は、己が血を分けし児の、たま／＼尋ね來りしを、門外に繋てゝ、巡査に引き渡したりとさへいふ。アヽ私生児、果して己に何の罪かある、たゞ親に罪ありて、児これが為に不幸の人となり、而して、彼等の親は、敢て之を意とせす、其罪を凝成して、子となす。これ實に人間の情に非す。而して如斯きの非行は、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

當世紳士の甘んじて忍ぶ處たり。凡そ子を愛するの人心あるものは、私生兒を擧ぐべきに非ず、即ち妾を畜へ、或は賤婦に慣るべきに非ざるなり。

教育死活の辨

◎讀書が益になるともあり害になるともある。學問といへば如何にしても効があるものとは言へぬ。ナゼ、効がないと言ふに、之が爲めに反つて人の活智を殺し、事物を直接に觀ずして、紙の上や、理屈の上から觀るやうな風にする。斯なれば、學ぶと彌よ多くして、愚なると彌よ深きに至り、遂に効なきのみか、害あるに至る。學問さへすれば必らず益あるものとは決して言へぬ。

◎左れば、教育者となつて人の子を預かるに、其の品徳の修まらずして惡感化を與ふるなどの害は言ふ迄もなきとし、純然たる智育の上に於ても、其の教へ方が惡ければ。反つて其の智性を鈍らせ、未だ學ばざる無教育の人にすら及ばざるものと爲らしめる。秦の始皇は書物を焼いて百姓を愚にしたと謂ふが、教育者の中には書物を餘計に讀せて人の子を愚にするものもある。

◎左らば、如何にして教へるが善きかと言ふに、其の教授方の細目に至ては固より數へ盡せるものでない。又、數へ立てる筈のものでもない。教授方の武器は、教育者銘々の得意にこしらへるもので、長短、大小、精粗、方圓、皆な其の自得する所から工夫する。甲の武器を乙が眞似て、一々其の揮ひ方に似せると云ふやうでは決して役に立たぬ。

◎夫故、如何に教授すべきかと、其方法を言ふヿは余り効の無いヿであるが、然し其の大體の要點を言はば、教へるものは、其教ふるヿに生命が無ければ成らぬと云ふの一事である。生命があるときは、精神あり、情あり、活智ありて、固より器械的で無いヿで、其の教へんとする事柄が、我本體に同化し、一點の疑ひなく、一毫の迷ひなく、一寸の間隙なく、我が之を信ずると言はんよりは、寧ろ之と同體になり、無意識になり居る程の關係でなくばならぬと言ふのである。生物學の元則に、活者活者を生むとも言ひて、生命は生命より來るものである。教ふるものが先づ其の智恵に生命を存する程

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

でなくば、教へられたる人の心中に生命として受入れしめるとは出來ぬ。

○書生の不心得の事を言ひ聞かせるにしても左様だ。彼の心に、疑を起し、不平を起し、反抗を起すやうなる關係でもつて何を言ひ聞かせても決して其効は無い、固より子供の事ゆゑ、嫌がるともあり、少しはムットするともあり、間口答へするなどの事はあるにしても、夫に構はぬ。子が親に對する時でも矢張り左様いふとがある　然し、其の有様が天眞で、たとへば繼母に叱られた時の樣に、めそ泣で、イヤナ顔點を滿すやうな事さへ無ければ宜しい。「コレッ！」、馬鹿め！なぞゝ、口きたなく叱られるとかあつても、夫は夫きりで彼に無頓着を装はず、理が其の子の胸臆に一つ改まる所が出來たとふやうな工合になれば宜しいので、教師が其子弟に對するも、此の關係でなくては成らぬ　親と子との關係、少なくとも、叔父さん甥子位の關係でなくては成らぬ　左なくんば、假令諄々言ひきかすれども、繼子が繼母に於ける如きヒガミを、つくろひさを後にのこすやうでは、悲慘の益なきのみか、反つて害がある。之も、教へる人の其の訓戒に生命なき所以で、別の辭で言はば、至誠の足らぬ柄である。

◎斯様に考へて見れば、人の子を教ふるの苦心は眞に喩へがない程である。一二人の子供の親となつてさへ、精一杯の苦勞が入る、數十百人の親がはりとなる苦勞の非常なとは申す迄もないよである。然し、一人の子供を持つも、十人の子供を持つても、親の慈愛に増減は無く、其の辛勞にも多少は為い。數十万人の子は多いやうであるが、力一杯にして見れば又夫丈けの力は出るものである　さうして、我が子の如くに思ふに至つたらば、教育者たるの愉快は、實に比類絶無の事である

固より、子が親を知らぬ如く、書生は教師の事を知らぬものである。然し乍ら、其の愛情、至誠を感得するとの早きは電氣の通ずるが如くである　夫、猫の如き盲聾不通の畜生でさへ、コチラの情を直ちに感ずるものゆゑ、人とあれば假令子供にせよ固より其の辨ではあるが、此の情感の迅速なるとは眞に驚ろくべき程である。夫故、教育者たる人の心次第で、反動は忽ちに顯はれる。教師の意見とか、思想とか、哲學とかいふものは中々容易に書生に分らぬにせよ、教師が其子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

弟を思ふの誠は直ちに通じて、寸毫しも間隙が無い。既に此の情が通じて、親子に類する關係となれば、たとひ智識の上に解釋しがたきとでも直覺して信ずる。吾親のエライことを子供が信ずる如く、教師の言葉を疑ひなく信ずる。即はち之を生命として這入るのである。凡そ、此般の關係よりして教育が行はるゝにあらねば、教育と云ふものが反ッて人の子をコマシヤクレタものになし、疑深きものとなし、活智なきものとなすは當然である。故に、正しく教へざるの教育は寧ろ教育なきに劣る。古より無學の人に俊傑、善士の反つて多かつた譯は、蓋し此邊の故であらう。

嫉妬の事

嫉妬といへば、女が男の仇心を嫉むことばかりのやうに考へて、これをいたく戒めたものだ、昔の賢夫人が、多くの妾を姉妹のやうに取扱ふたのことなどを美談としたものだ。しかし女の嫉妬には、まだ〳〵愛嬌があつてよいが、男の嫉妬ほど、見苦しいものはない。總ずるに、野蠻時代ほど男には嫉妬がつよくて、女には少ない。まづ鷄の例で見ると、牝鷄同士は仲よく遊ぶが、しかし牡鷄の中は喧嘩が絶えない。これは牝鷄を保護するのかもしれぬが、どうも、我所有のものを取られはしないかと嫉妬するかららしい。鷄ばかりでなく、他の禽獸も左樣だ。禽獸に近い野蠻人にも同樣の狀態がある。心に叶ふ女さへあれば、自分のものにしたく、そして多妾の中は平和で、他人に取られないやうとするのは、利己で、嫉妬すぎて、道德の進步しないのだ。此野蠻的根性が當世開化に誇る紳士方に多い。

文藝

河東節 唐團扇 （白樂天琵琶行評譯）

俗謠はもと鄙野の間に弄ばるゝものなりと雖も、其巧なるものに至りては、文流麗、情曲折、三昧に堪へたるもの尠しとせず。而して此等多くは、其作者の名を逸す。河東節とは、寛永、正德の頃、十寸見河東なるものゝ謠ひ出せし曲にして、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

俗曲中に在りては、やゝ高尚なるものなり。其曲中に、唐閑居なるあり。これは白樂天の琵琶行を翻案して、謡曲に擬したるものにして、彼文をとりて意を取らざるあり、意をとりて文を捨てたるあり、蜀山人は、此文を評して「杵壁の痕なし、本文と離れて合ひ、合ひて離る何等の筆力ぞや」と嘆賞したり。然るにこれまた誰の作なるやを知ること能はず。今爰に其全文を寫して、其筆致の妙を味はんとす。琵琶行は樂天詩中の傑作として、久しく人口に膾炙す。されば、殊更に其詩を舉げ来りて對照することをせず、たゞ讀者の參照を待つ。

原詩は白居易が元和十年、九江郡司馬に左遷せられし時、客を送りて、潯陽江頭に舟を掛けし時、長安娼婦のなれの果なる老婦が、舟中琵琶を弾じて、客懐を催せしに感じて作る處なるが、この唐閑居もまたうき河竹の流の末の女を以て主人公となせり。（シテは琵琶彈く女、ワキは白居易、ツレは船の從者）

・　・　・　・　・

ワキ　潯陽のほとり、江上の秋、秋風客を送つて一葉怪く、あしまをわくる船の中、酒をすゝめて白居易は、月にうそぶくあまの原、八重の汐路の末遠く、千里の外も限なくて、水のよどみもふかき江や、みぎはの蘆の絶間より、なほ下もゆるいざり火の、ほの見えそめし苫のうち、浦ふきかよふ秋風の、かすかにそれと琵琶の音か、おぼつかなみのしらべかも。シテ　四絃一聲すれば、ともに恨みを語る。まれにだにみぬめの浦の捨小舟、いかなる風によるべ定めん。ツレ　船こぞり居て聞もなほ、秋の哀も身にしれて、袖に涙のおもはえず、たぞやと問ふも涙の上。シテ　こたふる人もなくかもめ、びわ聲やんでおともせず。ワキ　なほしき浪のうつゝなく、下こゑよびもゝ聲よばふ舟の内。シテ　忍ぶとすれどあり明の、さやけき月に色もれて、苫ふくかげの花すゝき、ほのめく袖に露かゝる。ワキ　時に樂天言葉をやはらげ、いかでかく波にうきねの船よせて、妙なるびわのいとゞなほ、おぼつかなしや、さるにても、御身はいかなる御事ぞ　シテ　賤女のかゝる旅の下みだれ、うき身の葉もしらいとの、びわをいだきておもはゆく、なかばかくせしかほばせは、卯月に残る葉ざくらや、木の間の花の露おもく、打たれがみを、そのまゝの、衣もよしやにくからず。ワキ　樂天いとゞあやしくて、たれか比目の涙枕、かたね

の夢をうらみてや、いぶかしさよといひければ、シテ くちぶしの色にそむてふ山吹の花もあだなる身のむかしツレ かたるもさすが羽束師のもりてうき世の定なきいく宵々のかり枕、かはすちぎりも河竹の流のすゑと御らんぜよ。ワキ 扨はあだなる河竹のながれの水の末とほく、なぞこや炎にすむ月の行衛をかたりましませと、ツレ なほさしよする船の内、細手かはして、シテ 花と見し昔の春は夢なれや、芙蓉帳のうち、せし手枕のかずゆるく、ツレ ひしのたまきのはてしなき思にやせて、飛ぶ螢ながるゝ水の影うすき、あやのうちはの追風は、禿が袖の香ににほふ景色もよしや里わけて、片日夕だつ空め涼しき小村雨、傘の長柄をさしかけて、伽羅の足駄にこぼるゝ露の、つゆにぬれ〳〵ぬれてほす、猪の盃ゆらぐ手も、はでな心か、紅のもすそにすそにしたみ酒シテ また待宵にふけて廓の百羽がき、ツレ まぶな男のかすり歌、聞くに心のまゝならぬ、勤の客に下ひもを、とく〳〵しぼる露泪、シテ そよや浮身を巫山の雲の行衛とはれて、ぬるよひ〳〵にたれか身受のかねごとも、かしこはまゝよ此人の泪ほくろもうるさしど。シテ 男えらみに今年も過ぎつ、またくる春も、ツレ あだにちる姿の花もうつろひて、今は根引のまつ人も、たれにすがらんよるべも涙に、身をうき草の根をたえて、さそふ水とて行ふねの、ともにこがれて〳〵こゝに、茶をめせ〳〵小うり茶うりて世をわたる、その人にさへわすられて、やがてといふて、出船の片帆なみ間のよすがなく、こと浦風の音づれを、磯山松のよそにして、心にふくる有明のつれなく残る身はひとり、涙の外にとふ人もなく音を琵琶のもろこゑにふししづみこそいたりける。ワキ げにや商人は利を重んじて別離を軽んず、今樂天が身のうへも、都を出でゝはる〳〵と、かゝる邊土に謫居して、古郷の秋のなつかしく、糸竹のこゑもまれなるに、いと珍らしき琵琶の音の、ひなにはあらぬ思ひでに、今またかゝるうき涙、昔にかへす花の袖、都の春もあふ夢と、思ひくらべて、げにまこと、共に天涯淪落の、ツレ あひ合ひたりし身の上と、其歎息の音の葉に、なほぬれまさる紅のなごりの袖に琵琶とりて、絃かきならし嘈々と、シテ 村雨つたふ梢より、砕けて落る玉水の、岩にせかるゝ瀧川や、流もあへずせきとめて、たちまち裂くる銀瓶の水ほとばしる一曲も、是迄なりといふしほの、さしてわかれの聲々

も、盛ざかりゆく船のあと、月ぞたゆたふ波の細、しらぬものこそなかりけれ。

原詩の成句を縦横前後に用ゐこなして、而も意に於て些も害する所なくまたよく其詞を存す。文と情とは、其巧妙、彼に劣らずと称すべく、また俗に陥らず、此文質に絶唱すべし。大絃嘈々如急雨、小絃切々如私語云々といふをば、一村雨のたふ简より、砕けて落る玉水の岩にかゝる瀧川や、ながれもあへず、せきとめて、といひたる、妙手といふべし。これ実に中国文学の上乗となすべし。彼源氏の筆は、意を長恨歌に取りかゝるも、全く其趣を異へり。中島論語が、赤壁賦を翻するは、名あれども、拙にして陋、名の俗謡作家に於てこの好翻訳を見ることを得たり。

歌七首

花園女史門下生

夏月　升造　[illegible]子

うちよする浪の音あらき荒磯に
すゞしくやどる夏の夜の月

仝　香坂　彌子

よするかとみればかつひく荒磯の
なみまにうかぶ夏の夜の月

撫子帯露　高橋久野子

摘めすさめぬ朝のとこなつに
つゆ[illegible]こそおきそめにけれ

瀧邊納涼　山内　静子

落たきつあたりすゞしき岩がねの
おくにや秋はひそむ成らん

仝　野村稲江子

岩がねもる清水のひゞきに袖そへて
いよいよ涼しき峰のまつかせ

立秋　片山　節子

ゆめの間に秋は来にけんさよ更く
寝覚さびしき荻の上風

山　桜井　鋼子

見る見るに雲立さわぎふる雨に
ものすごきまで峰ぞはためく

史論片々

おうそむ

◎仁徳帝が、弟稚郎子と皇位の讓合をしたが爲に、三年間、上に君主なき狀態となつたが、其間に、さしも天位を覬覦するものもなかつたのは、不思議だ。應神帝崩御後直に皇兄大山守命の皇太子稚郎子を殺して、皇位に即かんとしたのを、未發に拒いだことさへあつた位、それに引つゞいて、すぐ、三年間も民をして歸する所なからしめたといふは、怪な處置だといはねばならん、この相讓つゝ、そして、稚郎子が、遂に自殺して仁徳即位したまでの間には、必ずや深き秘密が存してゐたにちがひない。これがたゞ伯夷叔齊の故事を追ふたばかりではあるまい。往古の歷史は邈として、其眞相を傳へないから、分らぬ。

◎仁徳帝は高き屋の事などから、堯舜のやうな君主と思はれてゐるが、此天皇は、なか／＼の英才にて、達見のあつた方らしい。位につかぬ以前から、攝津の難波に住居して、遂に即位の後にも、此を都と定めた。抑も神武が大和の橿原に都を奠めてから、代々の天子ごとに都を遷して、桓武が、平安城に永世の帝都を置いたまでの中にて、反正の河内に、仁德、孝德の攝津に、成務、天智の近江に、都を置いたのを除いては、悉く大和であつた。而して仁徳帝は、率先して大和の山の中を出て、交通便利ある海濱の難波津におつたのは、何かこの便利を利用することについての見識、いな事業があつたものと思はれる。此時分には、既に三韓との交通も頻繁であつたし、祖父なる仲哀は、筑紫に親征して、遂に陣中に崩じ、其皇后神功は、師を率ゐて三韓を征伐して、これより彼國は年々朝貢をなすことゝなり、また其上に彼の國に使を遣はした事もあつた。これより以前にも、已に外國との交通は、久しくあつて、素盞鳥の尊の行つた根の國とは、韓國だといふ說もあるし、孝靈帝の世には、天日槍が歸化したこともある。我國の歷史にこそ見えないが、支那の歷史には、上古我國と交通した事が書いてあるは、即ち彼此の人民が自由に往

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

來をしてゐたものと見える。しかし本式に朝廷が、外交問題にぶつかつたのは、神功皇后が初めらしい。よし初めでなくとも、殊に頻繁になつたのだ。應神帝の世には、百濟から學者が來て、そして稚郎子も、仁徳帝も、目の前に外國人を据ゑて學問をし、また彼地の事情も聞いた。その有様であるから、多少淺見のあるものから、當時外交問題に目をつけないといふとは無い筈だ。されば仁徳帝の如きは、父帝の定めた通り、位は弟に繼がせて、自分は名を捨てゝ、實權ををさめ、特に沿海の地に據つて、海上に權を占めやうとの考があつたものであらう。應神帝も、難波に目をつけられて、大隅島に高宮を建てられたとがあつた、仁徳帝と難波津の都と、との關係に就いては、歴史の語らざる深意が存じてゐるのであらう

○我國は素より環海の一島であるから、これに住む人民に、海事思想のない譯はない。上古の如きは、神武の東征を始めとし、ことに神功皇后が、仲哀帝の親征に伴ふた時には、大和を出で、越前の國の笥飯の神に詣で、それから北海の怒濤を凌いで敦賀で帝に會したのみならず、はては三韓征伐にまで出かけた。これを以て見ると、當時には隨分と丈夫な船舶があつたものでなければならず、かつや、人民が外國と交通した跡を見れば、彼等の中には大船を私有してゐたものがあつたにちがひない。應神以後の外國交通は、ことにはけしくなり、あるひは遣唐使があれば、留學生がゆく、これには、海波万里をものともせぬ海國人民の氣象が伴つて、早くより海事思想に發達してをつた事がわかる。たゞ支那朝鮮はかりでなく、歴史にこそ殘らね、上代からして、フヒリピン諸島、前後印度あたりまで航路を開いてゐたであらう、英國人は、海賊の後裔であることを威張るが、我國民も、また海賊では、なか〳〵海上を荒したもの、子孫だ、彼倭寇のやうなものさへあつた。しかるに、藤原氏權勢を擅つて、王政は衰微し出し、其上武人四方に割據して、終に封建時代となり、内國の事が多端になりて、油斷がならぬので、外國までにさう〳〵手が廻らず、だん〳〵縁が遠くなつた。人民は從つて海事志想に乏しくなつた。北條時頼の書いたといふ人國記には、伊豫は海賊の多き國柄と特に記してある。現に藤原純友の如きは、朝廷に叛き此の國に據りて、海賊の親方をしたし、

紀貫之は、土佐から歸京するに、西國の沿海で、海賊に出逢ふことをば、非常に恐れた。しかるに、此伊豫は、今日では、全國中で、海事思想に劣つた方だ。日本國民が全躰に封建時代、殊に徳川氏に至つて、其政略の爲に、海事思想に乏しくなつたことは、この伊豫の例で分かる。

◎宗教と政治との分離は、近世史の一大現象だといふが、宗教とは、もと人心を支配するものなれば、政治に關係しないことは出來ない。現に政教分離したといふ今日でも、かの愛蘭土の爲に信教自由を熱心保護したるグラッドストーンさへ、日清戰爭にて佛教國の日本が盛になつてはと心配し、獨逸皇帝も、宗教上から東方問題を觀るやうなもので、どうして政教は全く分離することの出來るものでない。されば政教が公然一致して居た時代に、政治問題は即ち宗教問題であつたは當然だ。我國では歷史の表面から見た處では、政教一致の事は、目立つてはゐないが、實は歷史家が、多く、この重要なる關係を看過してゐるのである。第一佛教傳來の時に、蘇我稻目其子馬子は、之を信奉し、味方には厩戸皇子あり、然るに之に反して、物部尾輿其子守屋等は、佛教を邪道といひ立て、蘇我、物部の兩家の爭となつて遂に物部は亡ぼされた。この事たる單に神道と佛教とで爭ふたのでなく、宗教を言ひ前として、政權を爭ふたものだ。いはゞ宗教の旗を立てたる政黨の爭であつた。第三者から見れば、どちらに是非はないのに、神道家の書いた歷史には、守屋等を是とし、また神皇正統記の如き、佛緣多きものにも「逆臣守屋を誅す」と記してある。

◎朝廷で宗教を最も多く利用し始めたのは、大中兄皇子及び藤原鎌足の行つた、大化の革新であつた。其改革は、唐の制度に倣つて、皇室に威嚴を加へ、中央集權を旨として、地方の族長の勢力を削るのであつた。然るに、地方の族長は久しく國土に據つて、人民とは君臣の關係を有してゐたのに、一朝此族長を廢したならば、人民不平を唱ふるに相違なきを以て、佛教を盛んにして、民心を他に轉ぜしむることにして、十師を立てたり、法頭を置いたり、地方の寺々を修繕したりなどした。此後に行基などが、本地垂跡といふ奇說を唱へて、神道を佛教に混じて仕舞つて、いよ〳〵朝廷の政治に干與し、後には僧兵が出來て、朝廷の權力を蔑視し、また源平の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

政權分爭にも大分手傳つた。群雄の世、藤原氏の門閥政治の時代には、名僧輩出して、最も智慧のあつて、文明の智識を有してゐたものは、僧侶であつて、彼等は、朝野の間に立つて、一大勢力を有してゐたのだ。封建時代になつても政治の顧問官に、僧侶が多かつた、秦朝の南禪僧正に於ける、家康の天海に於けるなど、其一二例だ。

信長の大失敗は、佛教を敵としたことである。彼が、明智光秀に弑せられたのには、堂塔伽藍を燒いた事も原因の一となつて、其時代には、眞宗門徒派は、九代蓮如上人によりて再興して、勢力非常なものであつたが、其十一代の顯如上人と信長との間に石山合戰が起つた。石山は即ち今の大坂城ので、門徒宗の本據の在つた處だ。然るに一寺院を以てして、信長の兵と相鬪ふ事數年、信長遂に之を下すことが出來なかつたのは、諸國の門徒等が、佛の爲に死ぬ時は、極樂に往けると信仰して、身命を抛つて信長を拒ぎ戰つたからだ。されど信長と雖も、其宗教の勢力に依頼せぬ事が出來ず、其時恰も天主教の渡來し始めたのをば、之を利用して、佛僧の勢力を殺がんとして、南蠻寺を建したり、之に寺領を寄附したりなどしたが、其勢力忽ち盛大となつて、教徒の團結が強く、信長も利用し切れなくなつた後へ、秀吉は、在來の佛教を味方につけた方が便利だと思つて、耶蘇教をば嚴禁した。其間際で信長が多年かゝつて取る事の出來なかつた、石山をば、相談づくで貰つて、其跡に大坂城を築いた。

家康も亦佛教を味方にして、其大敵たる耶蘇教の撲滅に力を用ゐた。家康は佛教を敵とするの不利なるを實驗してゐたらうし、其上に謀臣本多佐渡は、以前門徒衆で苦勞した人であつたから、佛教を味方にしたのだ。しかし門徒宗の勢力には恐れたから、一方では、非常に優待しながら、爲にまはつて、其結合の勢力を殺ぐ爲に、東西本願寺を分けたり、また他の門派に獨立を許すこととした。

武田信玄は、其父を逐ふたりなどしたのを以て、不德の人といはれてゐるが、しかし、彼は武人として兵法武術に達して居た許かりでなく、器量すぐれたる政治家であつた。今でも信玄といへは、甲州人士は、大變に尊敬をするさうだが、それは恩德の後世に及ぶものがあつたからだ。秀吉が、武田家の舊法を棄て、新法を用ゐて、甲州を治めた處が、人民は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

服しない。家康に至つては、身自から甲州を訪ふて、信玄の遺法を察して、舊法に從ふて之を治めることとしたので、人民は服したといふ事である。かやうに人民の信服を贏た信玄は、殆ど一生涯の間、越後の上杉謙信と戰爭をしてゐたのだ。かく戰爭ばかりしてゐたならば、缺乏する處のものは、ただに鹽ばかりでもなかつたらう、人民は疲弊し、財源は渇れなければならん筈だ、さうなれば百姓は塗炭の疾苦を訴へて、主なるものを怨恨するやうになるべき筈だのに、後世に至るまで州民彼の德を慕ふのを見れば、假令長戰爭の間でも、國を治むるに其宜きを得て、撫育を勉め、財政は上手に、そして百姓に疾苦を與へなかつたので、人々彼に悅服し、而して由來慓悍なる甲州人のことなれば、命を毫毛よりも輕しとなして、信玄の爲に戰ふたのものと考へねばならぬ。

◎外交を圓滑にするの秘訣は、姻戚に在りといふも、妄言ではない。歐羅巴諸國は、昔より互に姻戚を通じてゐたもので、或系圖學者の如きは、歐洲各國の帝王は、土耳其を除くの外何れも甚だ遠からざる親戚の間柄で、今を去ると百五十年前に生存してをつた二人の姉妹より分れたものに過ぎないとの說を立てゐるが、或は左樣でもあらう。現在でも、英國女王は獨乙の血を受け、其皇太子の妃は丁抹王の女だ。また獨乙皇帝は英國女皇の孫であり、露西亞皇帝の母は、英國皇太子妃の妹で、皇后は獨乙聯邦ヘッセ大侯の女だ。又希臘王の皇后は露帝の從姉妹で、其皇太子妃は、獨帝の妹だ。かやうに、緣に緣がからまつてゐるので、彼等の國の中で、或る政治問題の爲に合倂することがあつたり、また分離したりするといふのは、單に利害得失の問題によれるのみでなく、勿論、宗教の手傳ふこともあるが、親類の情合といふものが、大に關係してゐるのだ。德川時代の諸侯の事を考へて見ても、其諸侯同士の交際。また將軍と諸侯との關係は、これは即ち外交であつたが、この外交上の情誼の大部分は、姻戚によつて出來てをつて第一將軍家では、親藩、譜代大名と、緣が遠くならぬやうにし、また外藩とも血緣を結び、且つ譜代大名は、外藩と緣がかりにする。西藩に雄視して、德川氏の最も畏るべきものであつた島津氏の如きは、水戶や、松山や、其他の親藩、譜代と親類つゞきになし、將軍家とも肉緣をつないだ事もあつた。將軍家では又た公家と關係を深くする爲

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に、屢々宮家攝家から御臺所を迎へた。攝家では、大名の娘を、我娘分にして、公方に嫁せしむることも度々であつた。近く將軍家定の最初の御臺所は鷹司氏で、其次は、一條氏で、三番目の御臺所で、有名な天璋院は、島津齊彬の女で、近衛忠熙の娘分として、大奥に上つた方だ。かやうに、婚姻の連絡を以て、幕府、公家、諸大名を結んだのは、徳川氏の一政略で現に幕末に於て、公武合體の爲に、皇妹和宮の降嫁ありしなど、これ以て婚姻の、政治的交際上に、必要なるからであつたのだ。外交と婚姻とは、實に大關係がある、其事實については、史家、政治家の大に研究すべきものだ。我國が、此頃日英同盟だとか、日露同盟だとか、やれ何處の國と同盟するなどゝ、いろ〳〵得手勝手な事をいつても、元來、縁もゆかりもない、血のかゝつてもゐない、赤の他人同志の國間で、さう容易く、圓滑な交際が出來さうな譯がない

さびしさに出てくれば樅一本
な[illegible]て北斗にひゞくきぬたかな

雜録

朝の讃美

花影子

ほめまつれ夢よりさめて、
ほめまつれ天津御神を
あさ風は梢と鳥のさよふ歌、
うるはしき自然のしらべにさましつゝ、
絶間なきながれの響にあはせつゝ、
かしこみて讃き歌をさゝげあるに、
人の世に罪にねぶりて醒めやらず。
あゝ人よつみの夢よりとくさめよ
ほめまつれ自然とともにほめまつれ
いやしき我身の歌なしも、
すてずして、うけたまひてよ、あゝ神よ
あゝ神よ、大御心によりてつくられ、

いや聖き汝の御性を世にしめし
雲をいたゞきてひとり聳え、
御心の限なく高きを人に敎ふる、
巣守の山はあゝ巍々として
いかに高きかな
汝の御光にみち溢れたる
大空を御殿となしてひとり從え、
始なく終なき汝の御業を、
世のはじめより敎へつゝありし
汝の御性のおごそかなるを、
われらに示せし夜のいろは、
そのいたゞきよりやゝに消えて、
くらかりし夜路を照せし星も
跡なく去りて天地の命と光かゞやき
汝の慈愛のさまを示す
日は黃金銀の雲を蹈碎きて昇り來ぬ、
冷なる夜の風をなげきし、
林の木々と野草の花の
かほに滴り眼にみちし
露のなみださへ玉とかゞやき
梢はわらひ花はわらひぬ。
雲雀は喜び高く歌ひ、
雀はおどり蝴蝶はまへり、
よろづのものみな汝を悟り、
汝の慈愛を樂しみをれり。
いやしき我身も自然のうちに、
汝の御心を見るぞ嬉しき。
怒ればたちまち島を呑み、
ゆるがぬ山をもうちくだき、
大艦巨舶泡のごとくに、
跡なく消えしめて、
此世の業の果敢なき樣を人に敎ふる
はてしなき北海の波路を見ても
凪ぎたるときにも汝をおもひ、
怒れるときにも汝をおもふ
さゝ波大波聲はかはれど、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ともに汝の愛をかたる。
月なき夜半にもやさしき星の
光は此世の砂漠をてらし
怒れる大波たけるときも
汝の救の御聲を聞きて、
我罪悔いなば
何をか恐れむ
轟くいかづち天を劈くども、
大地を砕くどもこれみな汝の
惡魔を倒す怒の御聲、
我等が耳にはやさしき父の
恵の御聲と聞ゆる
うれしさ。

いざゆき　泉の小草のつゆふまん
やさしき花に人やおしへて
夕露なほくに植に置きえ、
みちわけゆける小野の小路

彼山此水

白水郎

◎下總の野

本所より下總の野を過ぎる汽車に行を以て、徒らに一切不語の者、實に無意味の地、人をして倦厭を生ぜしむと想ふ勿れ。山なき國は風景なしとの常套語を放つを止めよ。今座を起ちて窓に一歩、青田漠々として、四望開濶なく、心身鬱に閉塞するの時、忽ち彼方に帆影の點在せるを見る。之れぞ即ち山なき國の拾ひもの、舟楫、行旅、自然に目に觸る。而して汽車路の遠かなると、平野の望み遙きにより、雲霞棚て見えざるが如く、其茫漠なるや、寂寥なるや、人なして到底観賞に堪へしむ。吾れ下總の野に於て、初めて平野の奇なるを見る。吾は平野の讃なり。

◎刀根の下流

刀根の下流、水更に清く、流れ極めて緩かに、其汀畔、蘆葦叢生するの邊、白帆の隠見する、鷺鳥の悠々に浴める、釣夫の舳に佇み弄る、總て一幅の活圖畫、誰か此の詩趣にして、和暖なる汀畔の景趣を愛せざる。更に想ふ、江月潮と共に生ずるのとき、一層の雅趣に添にせずいかにぞ。

犬吠岬頭

刀根の下流、銚港に入り、銚港を僅かに一里、犬吠岬頭に達る。今我帝國を脱へる、太平洋に、其岬先、海中に突出する此岬なれとす。右に九十九里を控へ、左に鹿島洋を經る。此岬先に於て、潮流早き黒潮と、南來寒流との衝突する所。想ふ、海濤の凄まさ、觀望の大なるとは、岬頭の奇観なり。

湖底深く　果てしなく、
泛たゞ白帆　影輕く
飛波千丈　又万丈、
岸に砕くる　音捷し。
波の怨みの　いかならむ、
舟の心の　床しさや。

◎駿河灣頭

三保の松原、長く綠波に浮べる處、田子の浦わ、洋波の湛たるの邊、秀麗たる聖峯を仰ぐ、誰か山水の奇観に驚かざる、然かも、駿河灣頭、到る處、風色に富む。之れ若くは、我名山富峯の此に末因を成すによるべしといへども、芙蓉峰下、見孫の如き群峯、山相毅然、屹かり立ちて父山を仰ぎ、低陵平野亦よく之を對目に導き、灣口の清波、亦清韻、加之四季の寒温倶に宜しき得、此等、皆因相和し相同して、茲に此の勝藹を成せるものか。曉色、夕照、夏夜、冬景、春雨、秋氣、盡し可ならざるなし。此の多様なる景色、此の調和せる山水、他に求むべき得べきか、想ふ、天な降下の聖頭、豈に偶然ならんや。

一日静岡市外、賤機山上、登臨遠眺、人事幾變遷、山河何依然、感慨交至りて、山脚浅間祠内、拝殿に掛ける伊川、駿川兩法眼の天女圖を見る、元より名手の寫ぐところ、一點忽にせず、風神飄逸ながら活ける如し。嗚呼此の灣頭の風色にして、始めて之を描くを得んか。

◎濱名湖畔と須磨舞子

山穏かに、湖穏かに、然かも一の障なくして、悠然の眺望、更にいふべからざるは、須磨、舞子の眺めなり。一望平野の間、宛然鏡面の如く、然かも鏡頭、大洋に連りて、煙波渺々空に盡きざるの概あるは、濱名湖畔の眺めなり。彼や彼女の純美にして、此れ世界高尚の志士の如して

◎中國路の禿山

已に象の臥せるが如き播山に飽き、倚も中國路に進めば、禿山脉々、恰も巨人の立てるが如く、正に旅客に恐さる。旅客の思想、爲に倦む。然れども想ふ、若し老樹鬱蒼山路、秋風夜吹月清てふ、自然優雅なる想像、此禿山域に求むるを得んか。

◎夢の跡

相の浦、潮聲、磯松に千古の秘密を語り。御裳川今や水涸れて、糸の如き流れ、纔かに潺潺たり。赤間關畔、敗經、敗將等平家の七宰、一幕關下、無窮の悲音を残む。嗚呼天下の榮華を極めし一門の末路、あはれ夢の跡、小さき若潮せる安徳よ、剛勇猛なる能登守の亡靈、憐れ二位尼よ、僅かに身を擲して暗浪に沈下するを見る。日碑に傳ふ、平族沒落の男子は蟹に化し、女子は今色鮮々の魚に化したるもの、之れ小平家と名づけしとぞ。

◎米國の女子職業　米國は最も女子職業の盛なる國なるが近頃の統計に據れば同國には四千人の女俳優、三萬五千人の女藝人、一萬一千人の女美術家（画家として）、二千八百人の女文學者、八百九十人の女新聞記者あり別に女にて脚本を書き又劇場の支配人たるものもありて由なるが是は其数六百人もあるべしといふ

（時事新報）

妹に與ふるの書

曙[illegible]子

彼の君を二ケ月過しに見て、橫濱を出で、遠く西半球に向ひしは、昨日の如く思ほゆれど、今日此に歸り來つれば、翁上の渡の[illegible]頃さへなく、歳月も早や過ぎ去りて、梅の花の、雪の間にかをり出づる頃とはなりぬ。さくも、歳月の過ぎ去ることの速さよ。御身が父上母などゝ共に、吾を神戸に送り給ひしも、今は一歳の昔なり。御身が吾と共に神戸を船出し給ひしも、やがて少の間に一歳とはなりぬ。[illegible]御身は曾つて吾に[illegible]歳月に[illegible]思ふ[illegible]ならずして、いつから[illegible]に嫁さんことの[illegible]早や身を所ろ[illegible]に打たせめ、所ろまた[illegible]ものなれど、學業[illegible]などに、なき[illegible]みなければ、御身は女ながらも、未長く心を學問によせて、心の駒に、ゆめ手綱をゆるし給ふべからず。一度心の[illegible]の轡を[illegible]し、進み出んとせば、男も女も、[illegible]同じ狹き[illegible]目を見るべし。たゞに身一つの[illegible]にはあらで、[illegible]上[illegible]いまさめば、[illegible]心を傷め給ふ[illegible]此[illegible]、御身なつ[illegible]都に出し奉らば[illegible]御身が行末を[illegible]へずや[illegible]女の身なれば、年來れば、何れに嫁かんもよし[illegible]されど、[illegible]都に出でさものことなり。男も女も此の中、人[illegible]に[illegible]何處にもゆくべきところあるべし[illegible]さりながら、女[illegible]んは、身[illegible]女の男[illegible]も[illegible]らん。御身[illegible]すぐれたる人[illegible]に學を勸むるは、斯る遇ちあればこそあらず、斯る[illegible]何の[illegible]女子に[illegible]知らしめんがためなるなり。

願はくば、御身が行末を[illegible]給ふのみならんことをなり。御身は今や行末を[illegible]ふべき時にあらず、定ふべきものあらで、斯に御身を[illegible]めに望ふべし。御身[illegible]ここそ知れ、たゞ御身を生み給ひし母上を、御身を[illegible]育し給ひし父上を、深き恵み高き恩を忘れず、日毎に二十方の幸福を祈り給へ。家を思ひ二十方を安じ給らんは、[illegible]にも吾が[illegible]なり。[illegible]御身は[illegible]勸めに隨ひ、日[illegible]に勉勵して世評を[illegible]得き、深く思ふて其[illegible]を養ひ給はゞ、それにて事足りなん。御身は亦吾が今の身の行末を、如何にさ打ち案じ給ふなるべし。げに吾が不安も之ないよかり。吾[illegible]人[illegible]も不[illegible]の思をなせり。さりながら人の世にたゝんは其業を擇ばんためにあらず、吾其[illegible]にして、父兄弟妹に仕ふるに便宜だに欠かずば、何の望ありてか、今更[illegible]業を擇ばんや。何事にまれ身を委ねたらば、心を定め意を諧めて、事に從はゞ、何事か意に適せずといふことあらん。學者となるべき境に入らば、學者とならんの心掛こそ大事なれ。若し身を商に投ぜば、一派の卑賤なりとも、己に愉せんことをこそ努ふべけれ。其業に心を定め意を專らにするは、是れ其德を養ふなり。其業に達するは其德の[illegible]なり。其德の[illegible]には、御身も吾がために、吾が友等と共に心安かるべく、郷里の人[illegible]をも[illegible]ふるなるべし。御身は、己に嫁げる御身が[illegible]上[illegible]、御身[illegible]は、さすがに[illegible]間の喘みなく、郷間に生長して、其まゝ嫁ぎしものなれど、何の[illegible]する[illegible]のあるべき。世を終へんことを願ひ給はゞ、心を込めて智を研き、意を抑へて女徳を養ひ給へ。智は才を待つて事を成し、[illegible]を待つて、其[illegible]を成す。人さして[illegible]んこそ、男も女も皆な同じ[illegible]あるべし。男子男の[illegible]をなし、女は女の[illegible]なさば、世は眞の文明となり、身に[illegible]あるべし。[illegible]御身[illegible]都に連れやらせしは、[illegible]が故に外ならず。夫れ人、世に立たば、大[illegible]成して國に盡くすべし[illegible]人の[illegible]の業にしあれど、吾は、女性の御身に斯る事を望ますば御身も人に向ひて斯る事を望み給ふなかれ。吾れ御身に學を勸むるは、斯ることを[illegible]にはあらず、たゞく、其智を研き、女徳の如何なるものなるかを知らしめんを[illegible]なり。それ智は知の始めにして、知は行の本なり。往昔支那の[illegible]に、[illegible]といふ學者ありき。其見一世を[illegible]す。其いひしところも甚に[illegible]者、男に[illegible]、女[illegible]の如何なるものなるかを知り給はゞ、自ら行[illegible]、其[illegible]また自ら[illegible]べく、其[illegible]、其身は自ら賢婦となるべく、才女[illegible]人に[illegible]らるべし。深くこそ、人の世にたつ甲斐ありといふべけれ。見給へ、[illegible]一家を治むることを知らずして、何事で、國家を口にする男子の徒の、喧しきを。[illegible]にたつては、何々婦人會の[illegible]なり、何々[illegible]風會の幹事などゝ、世に時めき給ふ貴婦人も多くあれど、中には[illegible]わたりの御方にてありながら、何か深くは知られども、御離縁遊ばされたりと聞き傳ふるもあり。世には徒を足に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

し、粧を飾く人多し。是れ皆其智の足らざるが故なり。些かの学問をいさはこりがに、夫をも夫と思はぬ世の婦女子は、皆な斯様の人にして、首尾顛倒の過失に陥れるものなるぞかし。若し其夫たる人の、如何なる人なるにせよ、一旦偕老の契りだに結ばゞ、姉が夫として倚頼するところは、此人に外ならず。姉は最早や世の憂さを知り初めて、小さけれども、家庭といふ舞台に上りぬ。天曇り風雨烈しき時にも、喜び悦んで其雨にぬれ、天晴れ和うらゝかなる春の日には、其和気を吸ふて共に楽むなるべし。若し御身が姉上にして、心掛けだにあり、此間に立つて、能く其家を治め、其舅姑に仕へまつらば、期せずして其徳は発揚し、郷間に立つて賢婦の称へを得べく、其夫をも栄ばしめ、児女と共に其の生を楽しむを得ん、あゝ、かの皎靴踏冠の婦女子輩に比して、如何にぞや。

なほ告げ参らせんと思ふことも多くあれど、今や用務の迫れるものあり。惜く茲に筆をおさめて、他の日を期す。

富嶽雑詠

望不二歌　　山部赤人

あめつちの　わかれしときゆ　かんさびて、たかくたふとき
するがなる　富士の高根は　天のはら　ふりさけみれば　わ
たる　かげもかくろい　てる月の　ひかりもみえず　白雲も
いゆきはゞかり　時じくぞ　雪はふりける　語りつぎ　い
ひつぎゆかん　富士の高根は、

反歌

田子の浦ゆ打出てみればましろにぞ
　ふじの高根に雪はふりける

○

時しらぬ山は富士のねいつとてか
　かのこまだらに雪のふるらく　　業平朝臣

心あての空間はなほもふもとにて
　おもはぬ空にはるゝふじの根　　大宮中茂父

ふじのねをふりさけ見れば白雲の
　をばなにつゞくむさしのゝ原　　門原是秀

ふじの山きゆればやかてふる雪の
　一日も夏になる空ぞなき　　後京極摂政

富士のねの風にたゞよふ志ら雲を
　あまつをとめの袖かとぞみる　　光行朝臣

おもかげのかはるとばかりみるたびに
　さらにぞむかふふじの白雪　　二條左大臣

帝掬崑崙雪　置之扶桑東
突兀五千仭　芙蓉秀碧空　　秋玉山

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時文

◎幕末小史　巻二　戸川残花著　春陽堂版

幕末小史第二冊出づ。此巻に入りては、水戸の武田耕雲斎東奥、を始めとして、長州征伐、兵庫開港勅許、将軍[illegible]前後、長州再征其他に至るまでを、[illegible]もて評述せられたり。

◎江戸作者浄瑠璃集　日本館版

帝国文庫第九編は、水谷不倒氏の校訂に成る、江戸作者の浄瑠璃十三篇を収めたり。[illegible]の[illegible]、平賀源内、[illegible]町[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]の[illegible]時[illegible]、[illegible]、[illegible]の作[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]等[illegible]。[illegible]人の[illegible]に、今でも大阪の[illegible]に[illegible]たるものは[illegible]にして[illegible]、江戸は[illegible]も大阪に及[illegible]。

◎女界文摘　（本月十六日まで）

女子教育の現況（[illegible]山[illegible]子）	学の[illegible]八[illegible]号
男子の無自覚（同、[illegible]し）	同　上
我[illegible]清人等に対して（万[illegible]）	日本赤十字第六十四号
我女子教育の私議を述ぶ	[illegible]新聞八月十九日
女子教育の事[illegible]いかな	同　八月廿日
良[illegible]賢母の[illegible]専ら女子今後の方針（西川平[illegible]）	日本新聞[illegible]号
今代女訓[illegible]口調（高橋五子）	[illegible]第七十号
卒業生は男な[illegible]女なり	女[illegible]第百六十三号
女子教育意見	教育[illegible]第九百八十九号
現今の女界一瞥（坂本三十郎）	女子の友第二十八号
家庭問題（山形[illegible]信）	[illegible]雑誌第十五号

片々

◎日本赤十字社員は明治三十一年前半期の統計によれば、総計五十一万七千六百二十八人にして、内名誉社員二十三人、特別社員一万六千八百二十七人、正社員四十九万九千四百〇八人、賛助社員一千三百六十二人、而して其中年醵金義務終了者二万四千六百卅二人、有功章佩用者百八十六人、外国人二百九十九人ありといふ。

◎女子教育の振はざるは女教師の不完全なるによる、今日容貌の極めて醜く、偏屈にして学を好む女に迄へば女教師でもするより仕方がないといふ。女教師といふは、満足に結婚する見込なき女の自活の道を求むる種となりて了へるのみ。いはゞ一種ある女の隠遁場たるのみ、世人の女教師を見ること斯の如くにして、[illegible]多きな女教師に問ふべけんや。彼ら偶々他を[illegible]すれば多くは其たさ小[illegible]ないじ合て[illegible]所を始末することを知らず、別[illegible]に[illegible]ふるの道を知らず、其子女を教育するの法を知らざるなり[illegible]の手に委して、女子教育の振作を謀る、誠に轅を北にして、[illegible]にゆかんとするのみ。

◎[illegible]氏の[illegible]に曰く、[illegible]の女子教育は、事々しきものにあらず、能く家に[illegible]なるを[illegible]の用あらば足れり、[illegible]は女子に取りて最必要なり、和歌は[illegible]の[illegible]に[illegible]ばよき[illegible]なり、字面のよしきは[illegible]きものなれば、習字の必要もあるが、其上はた[illegible]、[illegible]もて[illegible]化し、教義なもて人格を養ふにあるのみ、[illegible]るべからず。（[illegible]新聞）

◎東京市内の[illegible]統計[illegible]は[illegible]に[illegible]る本年一月より三月に至る[illegible]の調[illegible]、一月中[illegible]は四十三、[illegible]四百九十七、[illegible]三十[illegible]五千六百六十九坪四合、[illegible]八千八百六十六円[illegible]十[illegible]、二月[illegible]四十、[illegible]二千百九十九坪二合八勺、[illegible]二[illegible]百九十[illegible]円、三月分[illegible]九十一、[illegible]一千七百四十四、[illegible]三[illegible]千四百八十七坪二合七勺、[illegible]十四万五千百十五円九十六[illegible]、合計[illegible]二千四百五十七、[illegible]八十三、坪数二万九千三百五十九坪九合五勺、[illegible]四十六万六千九百十七円五銭[illegible]なり。

◎[illegible]方の[illegible]、現今の学校の教授は昔より有さやらぬ悪く下[illegible]に注して居られ[illegible]、又は[illegible]など[illegible]の[illegible]、[illegible]よりは、[illegible]の家の[illegible]でよいさの[illegible]ふのが多いさうだ。（[illegible]新聞）

◎札幌小学女生徒の七十人中、四十人は剃者なりと。其原因に、[illegible]、[illegible]にある由。

東京市中の　浮浪の徒は、親方株百五十六人、其乾兒四百四十八人、八百五十四人は獨立なりといふ。總計千四百五十八人。

每日新聞の評月旦「余多少を」を歎ふて曰く、

自話索替衣。思明金一圓。孫花散光耀。姓名天下傳。窮士性奸詐。子女爲奇貨。騙得二百圓。一時充飢餓。嗚呼二百圓。輕如塵芥。一圓之重。似泰山。世人睥睨余多少。不問性命於其間。汚穢名譽而不顧。貪婪無妙不敢辭。

世界中の婦人　アーネスト、ハート夫人は此頃ヤング、ウーマンと云へる雜誌に記せる所に、世界上若干の婦人はビルマにありとして曰く、ビルマの婦人は恐くは世界上最も幸福に且つ自由の身なるべし、印度支那は婦人を卑しみ、又他の亞細亞印度は婦人を閉門するの風習にて、殆ど其自由なき有様なるが、此女卑的兩國の間に介せるビルマの婦人は、生活上最も自由にして職業は何を爲すとも自由にして、東洋諸國の人民には見る可からざることなり。且つビルマ婦人は最も勤勉にして、活潑なり、之に反してビルマ男子は甚だ怠惰にして何事もなすなく優游閑々として其日を暮らせり。又ビルマ男子は宗教的にして、婦人は智性的なるは甚だ一般の情態と異るものと云ふべし。（京華日報）

東京市內　の遺失金額は本年一月より六月までにて、三千四百四十圓七十三錢三厘、內遺失者の手許に戻りたるは、一千七十七圓五十六錢四厘、拾得者へ附與したるは二千三百六十三圓十七錢九厘。（東京新聞）

男裝女教師　米國高等に男裝女教師あり、また同國名古村に、小倉の衙署を勤めたる裁縫看護教員ありといふ。（東京新聞）

露國の女子專門學校は二百有餘。

女學雜誌の評　女學雜誌第四百六十九號の論評中曰く、社說の蓄妾打擊は、蓄妾者が泥濘に落入りつゝあるを斷乎として防がざるべからず、是れ當然たる志士の義務なりと絕叫す、同紙近頃の大氣焰（西肥日報八月十八日）の社說に於て蓄妾より結果する家庭の波瀾不行跡醜の秘密を容赦なく暴露すべしとて万朝の蓄妾搭發を紹介りと迫るに倒たり、妾を娶る東西相逢ふ乎の一鶴奇譬（仙臺新聞八月廿日）明治第一番劍に加擔して蓄妾打擊を絕叫し斷る力む。是れ當然女學雜誌の本色ならんも、其筆は其論調の甚だ浮佻に傾きたるを惜む（扶桑新聞八月二十三日）

蓄妾問題　万朝の蓄妾實例出でゝより、蓄妾問題盛んとなれり。社會雜誌はこれを統計的社會的に觀察したるあれば、早稻田文學及び東京新聞等にも、これに關する議論あり。これが今後ますます盛んなるべし。又統計家中にては、叨りにこれが統計をなすものありとか。然しながら万朝に出された蓄妾家の御本人は、洒然として、かへつて自慢の種とする風なりとか聞くは苦々し。

時報

●備中高梁順正女學校々長福西志計子氏の逝去

備中高梁町なる順正女學校の創立者にして、其校長たる福西志計子女史は、二三年以來肺患の煩はす所となりしが、療養遂に叶はず、去る二十一日永眠せられたり。同女史が一生を女學に寄せたる其功勞は、永く斯界に紀念すべきものたるを以て、今左に、同女史葬送の際、同地の傳道師伊吹岩五郎氏の朗讀したる略歷の全文を載す。

故福西志計子之略歷

志計子は弘化四年十二月を以て高梁御前町に生る父を〇〇と云ひ母を秀子と云ふ幼にして怙を失ひ母の撫育に人となれり當時女子教育の重ぜられざる時代なるを以て女子にして高年齡を越へて書籍を學ぶ如きは世人の異とする處なりしも幸に山田方谷先生のあるありて先生に就きて句讀を學ばれたり十七歲にして其夫と婚儀を擧げ家庭を保つに至れり明治八年の頃岡山に出でゝ修業し明治九年高梁小學校附屬裁縫所教師となりて專々教育に從へり明治十二年金森通倫氏の來りて基督教を說くや子は同僚木村氏と熱心に之を聽き漸く信ずる所あらんとす社會は基督教を蛇蝎視し之れを忌する者多し故をもて子は木村氏と共に其職を辭し明治十四年十二月に至り向町に私立裁縫所を開設せり之れ實に現今順正女學校の基礎たり此基礎成ると共に子の生涯は開展せり子の一生の勢力は實に此事業に集注したり其設立の初めに當りては生徒三十名を越へず其月謝よりの收入の如き少きは僅に貳圓許りなりしとすらあり然れども一度女子教育の爲に注がれたる思念は容易に挫折せず一難每に益激し殊に女傑メリー、ライオンの傳を讀まるゝや青年女子を教育するの必要と之れが爲に力を盡すの天職たるを認識する深く手藝のみにて女德の養い難きを知り萬障を排除して文學科を併置するの企圖を抱かれたるは明治十六年の事なり翌十七年は新宗教と地方人心との衝突甚しく基督教大迫害の此地に演ぜられたるは實に此秋にあり此迫害の時期に於て京都より故藤田愛爾氏の來高せらるゝあり子は藤田氏に向つて女子教育の忽にすべからざるを談す藤田氏之を賛し牧師森本介石氏又同情を表する篤し是を以て在岡山の金森通倫氏に謀り一面相談委員に謀る諸氏熟議の末一致贊助せらるゝありて文學科教師招聘の運に進めり神戶大阪京都の地に運動し幾多の辛苦を經て教師を得るに至れり如此して順正女學校は手藝と學科とを教授するを得裁縫所に一進して女學校たる實を備へたり爾來年を改むる每に盛大に至り明治二十三、四年に至り世間の風潮女學に可ならず所々の女學校は衰運を來せしも順正女學校は此間に却て好况を追ふを得たり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治二十六年に至り校舍新築の議起り子は寢食を忘れて奔走盡力し明治二十八年三月工を起し同二十九年八月校舍寄宿舍全く成りぬ是れ有志の士の贊助によること多しと雖子は其中心たりしなり可憐哉子が三千金を集むるに心力を盡したる結果は遂に病魔を引起し其身體の漸く衰弱するや肺患となり療養怠るにあらざるも月日と共に病勢重きを加へ昨年九月よりは教授を取ること稀に本年三月二十九日即卒業式當日吐血せられしより臥床にありて靜養せられたり常に曰く校舍新築は其身を蝕へりと去月二十五日俄然病勢革まるや翌二十六日卒業生及生徒を招き訣別辭として病床に横はり一場の訓誡を與へらる爾後加療道を盡さゞるにあらざるも現世の離せ易を離せ終り本月二十一日則安息日午後七時啣然永き眠に就けり永眠時に先たつ纔ば二時間教會の兄姉相集りて病床を邊りへ繞し祈禱を爲す時其の教友祈禱し終るや子は微なる聲を以て次の祈禱をなせり

天の父は我女學校と我家族とを助け導き玉へ父よ我をして速に新しき天と新しき地を見せしめ玉へ我を緑の野に臥させ息ひの水濱に伴ひ給へ

と呼吸迫促の間我等の聞き得たる最後の祈りは是なり此莊嚴なる語を以て祈りたる二時間後は新しき天と新しき地を見んが爲に急ぎたり嗚呼順正女學校の慈母は逝きぬ永眠數時間前「左樣なら御先きに」「待て居ります」と言はれたるが此單純なる言語の内に絶める泰然自若たる自信は其顔に一種平和の氣を帶び我記憶を消すこと能はざるべし而かも我等は再び其肉體に之を見るの期なし今日以後順正女學校の北丘上其冷たき體を横たへ其靈は永遠の父の膝より永久に我順正女學校を保護せらるゝならん我等の情は餘りに熱し我等の氣は餘りに熱せるを以て敢而其性質を記することもなく一に會葬者の默想に讓らんとす

伊吹岩五郎拜記

◉越中伏木婦人教會　同會は越中伏木院不還寺内に在り。有志婦人等の發起によりて時三十年六月創立せられ、現在會員は五百有餘名に上れりといふ。

◉貞婦賞與　東京市京橋區鈴木町渡邊富次郎妻ハナは、夫富次郎が永く不治の病に罹り、家計益ゝ貧窮に陷りしも毫も意とせず、刻苦艱難を供して看護怠らず多年一日の如く誠に奇特なりとて去月二十九日東京府知事より左の如く賞與ありたり。

東京市京橋區鈴木町　故渡邊富次郎　妻　は　な

夫富次郎存生中能く之に事へ其病に罹るや家益貧窶に迫るも刻苦艱難を供し看護懇到多年渝らず洵に奇特とす依て爲其賞金一圓下賜す

明治三十一年八月二十九日　東京府知事正五位　肥　塚　龍

◉孝女受賞

山形縣羽前國東村山郡明治村　故庄司吉職　二女　り　ん

幼時より孝心深く齢僅かに十三父母の貧困を見るに忍びず乞ふて他家の傭ひと爲り其收得金を悉く之を兩親に致す會々父身體不隨の症に罹り母亦老衰獨姉あるも盲目にして家事を執る能はす生計益々窮蹙するを以て主家を辭して我家に歸り力を養勤苦懈らず其志操に渝へざること爰に二十有六年洵に奇特とす仍て其賞として金八圓下賜候事

明治三十一年八月廿五日　山　形　縣　廳

◉貞婦受賞　米澤市上花澤町士族中島忠保の母ふみは、去る廿八年夫病歿し、男又尋で病死し、爾來一家將に離散せんとするに際し、老姑を奉養し、幼兒を就學せしめ、操行を渝へざること十餘年、依て縣知事其貞節を賞して金二圓五十錢を下賜す。

◉同　羽前國西置賜郡豐田村鈴木兵工衛門妻ナミは三十四年間克く孝貞の道を盡くし、四肢の自由を失したる姑の老病を看護し、一家和睦子女孝順なるは其德化の致す所なりとて、木杯一組を下賜されたり。

◉孝子受賞　羽前米澤市の士族太田標倫は、養母の身體不隨病に罹りしに看護怠らず、然るに家計ますます困難の中に、銳意一家を支持して、十年一日の如し。縣は之を賞して金二圓五十錢を下賜す。

◉孝子　岡山市に一孝子あり、年僅かに十三歳貧く且つ病める母を看護して大人も及ばず、知事高崎親章氏賞狀を與へ山陽新報は義捐金を募りて十八圓二十七錢二厘を得たりとぞ。

◉感心なる婦人　信州伊那郡龍丘村役場書記前に、現品を新聞紙に包み左の書面を添付し置きたる婦人有りたりといふ。

拜啓陳はふ下の郡一木生明十時桐林村かの病舍にて養生中なるよし患者へ御届け被下度右は殘暑きびしき折から兩三日の雷雨さぞかしと思ひやられての送り物多少なりともかめなくつれ／＼の折節を御なぐさめ被下度御依賴申候也

八月十四日　貧婦

衛生係御中

◉孝女　孝行其身を忘る、大分縣西國東郡田染村大字上野瓔田晋氏の三女ミエ（二十三年）大分新聞八月廿日／孝子情の露に濕ふ　熊本市山鹿町渡邊美治（九州日々新聞（八月廿一日）◉貞婦　福井市四川ノプ（二十六）（東京朝日新聞八月卅日）

◉婦人懇合俱樂部　米國コロラドに開く同俱樂部の總會へ出席したる津田渡邊兩女史より、此程文部省へ宛て開會當時の景況及び演説の大要を言越し來れり。當日は來會者約三千名に達し、一人五分時間を限りて演説せしめたるが、素より短時間の事なれば大抱負を演じ得べきにあらざるは勿論なれど、津田梅子が簡單ながら巧妙なる英語を以て、我皇后陛下の女子教育に大御心を注がせ給ふ御聖德を頌し奉り、續て日本に於ける女子教育の現狀を略述せしが、痛く來會者の喝采を博し中には布哇が其の移民の上陸を拒絶せし日本に斯る高尚なる婦人あらんとは考へ及ばざりきと私に慚愧の色を表はしたるものもありしと云ふ。（萬朝報九月一日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故若松賤子女史譯述

再販

小公子

全一冊洋装美本
紙数二百五十頁
正價金三十五錢
郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し劇場に演ぜらるゝ數十百回、一代の流行を占有して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本當代の勢力なり純潔無邪氣、天使の如き一少年は、冥頑執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行恰て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち、讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史嘗に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一回を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹して遂に卷を釋る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち茲に其遺稿を收め、女子が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女子は字を題し、郷友松井升氏は緒言を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

大賣捌 東京巣鴨庚申塚 女學雜誌社

岡山孤兒院賛助員募集

一、本院の目的を賛成し毎月金拾錢宛寄附する人を賛助員と稱す

一、寄附金は毎月本部或は支部より事務員を巡廻せしめ領收可致候

一、賛助員には毎月發行の岡山孤兒院新報を進呈し院況を報告す

一、賛助員たらんと欲する方は左の申込書に住所姓名御記入の上御差出被下度候

明治三十一年五月

岡山市門田屋敷

岡山孤兒院

岡山孤兒院概則

第一 位置 本院は本部を岡山市門田屋敷に、支部を日向國兒湯郡に置く

第二 主義 基督教即ち天父と愛人の道を實行するを以て本院の主義とす

第三 目的 天下の孤兒或は事情之れに均しき貧困の兒童を救濟し其父母に代りて之れを教育するを以て目的とす

第四 入院及退院 六歳以上十二歳以下の者を入院せしめ、十六歳乃至廿歳にして退院せしむ

第五 普通教育 岡山孤兒院尋常高等小學校に於て普通教育を施し、學業拔群のものは尚ほ進んで他の高等學校に入學せしむ

第六 實業教育 年齢十二歳に達すれば學業の余暇、院内の實業部に於て勞働に從事せしめ、卒業の後は院内の各實業部に於て或は院外の職工家に依頼して一の職業を修めしむ

第七 維持法 内外同情有志者の臨時寄附金品と、賛助員の寄附金と(一ヶ月金拾錢宛寄附する人を賛助員と稱す)、實業部の收入金とを以て之れを維持す

第八 報告 毎月一回岡山孤兒院新報を發行して院況を報告し毎年二回(一月、七月)會計の決算報告をなす

概況

(一)明治二十年九月(開院)より滿十年十ヶ月、入院兒總計五百五十名(現在兒二百六十名)役員三十名(事務員九名、學校教師六名、實業部員七名、世話人十二名)年齢最幼兒四歳最長兒二十三歳(平均)經費一人につき一ヶ月金三圓餘、兒童の居所九棟(岡山にあるもの十三棟日向支部にあるもの九棟)、學校(岡山孤兒院尋常高等小學校及夜學校あり)、實業(岡山孤兒院活版部、日向活版部、理髪部、履業部、精米部、機織部)

明治廿五年三月十九日遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十九日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY